The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	教科書からみた満洲の唱歌教育 ： 「外地」における新教育の理想と現実
Author(s)	平尾, 佳子
Citation	阪大音楽学報. 2020, 16・17, p. 85-143
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98479
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

教科書からみた満洲の唱歌教育
――「外地」における新教育の理想と現実 ――

平　尾　佳　子

はじめに

本研究は、大正期から昭和初期に刊行された日本人学校用唱歌科教科書研究を中心に、満洲の唱歌教育の企画から受容をたどることで、独自の教材にまつわる文化的な言説を明らかにしようと試みたものである。本論の主な関心は、内地では1920年代後半に退潮していった、子どもを教育の中心に据えようとする新教育（自由教育）の影響を、満洲の唱歌教育の中に見いだすことにある。

日露戦争後の1906年に日本の租借地となった「南満洲」[1]では、1907年頃から主要な都市部において日本人学校の開設が準備され、1910年頃にかけて漸次開設[2]されていった。このとき最初に導入されたのは、内地の諸法令に準拠した内容の教育[3]であった。

ところが、この日本人教育の始まりが、新しい教育思潮が広がっていく1910年頃であったという時代性と、租借地という場に働く力の作用によって、その後の満洲の教育は内地の教育の鋳型の内にとどまらなかった。むしろ、新しい教育思潮の影響は内地よりも、1920年代から30年代の満洲の教育のほうに明確に表れているといえる。

この時期に先立って、明治初期に始まった近代教育は国家による国民形成の制度であったが、日清・日露戦争後のナショナリズムの高揚と社会不安、「国際化」の時勢の中で、制度や内容の見直しが続けられた。そうした結果、義務教育年間の就学が安定し、ほとんどの子どもが尋常小学校卒業になることで、小学校は国家による教化の場としてだけではなく、進

1　南満洲とは、日露戦争後の第一次日露協約（1907）によってロシアの勢力圏「北満洲（北満）」に対置された日本の勢力圏で、遼東半島先端部に位置する関東洲と南満洲鉄道株式会社沿線の付属地を指す。

2　学校開設当初は普通民家を代用した校舎で、その後に新築された校舎も使い勝手が悪かった。しかし、1918年頃には現職教師の意見を参考にした設備や特別教室が設けられるようになり、1923年頃には学校の位置が市街計画に組み込まれるようになって、運動場に百メートルのコースが楽々と取れる規模になっている。また、僻遠の地に居住する児童の通学困難解消のために、旅順と大連管内以外の小学校には寄宿舎が設置されている。（編著者不明1932：109-112）

3　満洲には内地と同じ内容の教育が導入されたが、制度においては大きく異なり、義務教育ではなかった。在満日本人の教育に関する意識が高かったので、実際の就学率は「内地に比較して聊かの遜色もない（編著者不明1932：３）」とされているが、満洲の小学校は「自由的非強制的で学齢児童の就学を強制しない（同掲書：２）」方針であった。その理由は、日本人と同じ地域に住む中国人の子女に対する義務教育が保証できないことにあり、教育の機会均等を欠くからである。

路選択につながる資格付与の場ともなった。ところが、公教育の質的水準の担保のために進められた教育方法の定型化が画一化を招き、教育の営為を教師による教授中心から子どもによる学習中心に変容しようとする運動が起こる。すでに欧米で広がっていた「児童中心主義」の教育は留学などの文化交流を通して移入され、子どもの個性、主体性、活動性を重視する新教育は、伝統的な生活理念から解放された、子女の自由な職業選択による階級離脱を望む都市の新中間層に支持され、硬直した学校教育に対する批判が広がった。

しかし、新教育の拠点には官公立師範学校附属小学校や私立学校が多く、「その革新的な教育改造の試みもいわばブルジョワ階級の支援と理解（山本 2014：241）」に依拠していたために、この教育的な運動は大きくは進展しなかった。その他の圧倒的多数の公立学校には教則による規定があったので、子どもの現実に合わせた教授方法が工夫されるようになっても、教育内容を改変、あるいは再編するまでには及ばず、運動自体も次第に退潮する。さらに、1924 年頃からは、新しい教育思潮が目標とする「自由」や「自主」のための社会実践が反体制的要素を惹起する懸念から、新教育の推進者は国家権力による干渉と弾圧の対象となった[4]。

そうした一方で、満洲では新しい教育思潮が拡張する時期の只中に学校教育が始まり、1922年には国定教科書の補充を目的に独自の教科書編纂事業が計画され、実行されている[5]。このとき、大正期の教育思潮の特徴とされる教育改造の試みは、国家的な戦略の場であった満洲の教育にどのような形で表れているのだろうか。本稿では内地とは異なる地理と行政下にあった南満洲の唱歌科教育を、大正新教育に内在していた可能性を具現化したものとしてとらえ、独自の唱歌科教科書[6]と唱歌教育の内容に注目した。調査の対象とする年代は、満洲の日本人学校で広く用いられた唱歌科教科書『満洲唱歌集[7]』が発行された時期に対応させて 1924-1937 年とし、調査と分析の中心に満洲国建国以前の戦間期に編集された教科書（第一期：1924-1931）を据えながら、内容の重複[8]による連続性を重視して第二期（1932-1937）の教科書を含めた。

4　新教育運動の高揚期にも講演会を禁止する「茨木県自由教育禁止事件」（1921）や、文部省による広島高等師範学校附属小学校への注意があったが、1924 年 8 月の文部大臣岡田良平の訓示以降、新教育への弾圧・干渉事件が続く。国定教科書を用いずに「修身」の授業を行った松本女子師範学校附属小学校の川合清一郎訓導は退職に追いやられ、奈良女子高等師範学校附属小学校の合科授業は文部省から非難され、千葉師範学校附属小学校では自由教育推進者の手塚岸衛は転任を余儀なくされた。（山本 2014：239-240）

5　こうした事業が可能であったのは、南満洲が外務省の管轄下であったこと、さらに編集の時期が国際協調外交の重視された戦間期であったという特殊な条件によるところが大きい。

6　満洲独自の唱歌科教科書の発行は大正末期（1924 年）から満洲事変（1931 年）までの第一期、続いて満洲事変の翌年から日中戦争開始（1937 年）までの第二期、さらに太平洋戦争開始（1941 年）までの第三期と在満・関東国民学校期の第四期に大分される。（磯田 2000b：150）

7　ここでは教科書としての『満洲唱歌集』を取り上げるが、「満洲唱歌」とは「満洲の歌」という意味であって、子ども向けの歌にとどまらない。「満洲唱歌」はピースの楽譜としても発売されており、そのなかには「満洲小唄」のような歌謡曲も含まれている。

8　第二期『満洲唱歌集』は第一期『満洲唱歌集』低・中・高学年用をもとに各学年単位に拡充されたもので、教材のほぼ半数は第一期『満洲唱歌集』と共通している。また、『満洲唱歌集』を教科書名にするのは第一期・二期に限られ、第三期以降は教材の大幅な入れ替えとともに教科書名も変更されている。（第三期は『満洲小学唱歌集』、第四期は『ウタノホン』・『初等科音楽』）

満洲独自の教科書編集は唱歌科教科書に限らず、事業の全体の目的や編集過程に内地の国定教科書編集とは異なる部分がある。その相異の第一は、官庁である関東庁と半官半民の南満洲鉄道株式会社が合同した教科書編輯部を中心に、国家とは相対的に区別された地域社会の教育[9]が計画され、実行されたこと、第二には教科書編輯委員が当時「実際教育家」や「教育実際家」と称された現職教師（あるいは経験者）であったことである。

教科書編纂事業の舞台となった南満洲は外務省の管理下にあり（文部省内教育史編纂会1964：4）、日本人子女の教育は内地の教育を基準としながらも、政治的、地理的、文化的な違いから独自の教育内容が勘案される必要があった（南満洲教育会教科書編輯部1932：13）。関東洲と南満洲鉄道株式会社沿線の付属地ではそれぞれに教材研究や教科書編集作業がなされていたが、1922年、関東庁と南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄と表記）は事業の合理化を目的に、合同して教科書編輯部を設置（南満洲教育会教科書編輯部1932：13-14、21）、「日支人に対する適切なる教科書を編纂」（同掲書：９、教科書編輯部理事・満鉄学務課長有賀庫吉）し、印刷、配給までを直営（同掲書：98）するに至った。[10] つまり、国定教科書だけでは対応できない満洲で育つ子どもたちのための教育が、教科書編集の段階から公的機関を交えて大規模に企画されたのである。歴代の教科書編輯部幹部は、事業の目標を在満日本人社会の存続と発展のための人材育成として「民族協調」にも言及しており[11]、教科書編集事業が「植民地の環境と児童将来の生活上の要求」（編著者不明1932：２）を勘案した地域教育であることを明らかにしている。

さらに内地の国定教科書編集と大きく異なるのは、現職教師（あるいは経験者）が「編輯委員に加わり、闊達に活動していた[12]」（南満洲教育会教科書編輯部1932：31）ことである。関東庁では以前より「教員採用に際しては現に内地に於て教職に従事して居る優秀な者」（編著者不明1932：４）を条件としており、第一期の教科書編集を担った二人の唱歌科（歌曲担当）編輯委員[13]――島田英雄（1881-1943）と園山民平（1887-1955）――も二十世紀初頭の新しい教育思潮に触れ、さらに教職経験を積んだ教師であった。

9　この教育計画の目的が植民地教育であったことは、南満洲教育会の機関誌『南満教育』の中に確認できる。（南満洲教育会1925：112）

10　こうした経過から、朝鮮や台湾などの他の日本の植民地の日本人子女には原則として内地と同じ教科書が用いられたこととは異なり、満洲では独自に編集されたものが多く用いられることになった。

11　南満洲教育会教科書編輯部の教科書編纂では日本人学校用と中国人学校である公学堂用の二種類が作成されたが、日本人と中国人の教育の目標は同じではなかった。日本人の教育の理想は「満洲における五族の指導民族としての日本人に、大陸人としての資質を具えさせること」（南満洲教科書編輯部1973（復刻版）：４、復刻版の序文・白川今朝雄）であり、「満支人」の教育の主眼は「よく正義人道を弁え、善良なる洲民、理解ある満洲人として皇国同仁の徳化のもとに其の平和に事業を楽しませること」（南満洲教育会教科書編輯部1932：６-７、日下辰太）であった。

12　編輯委員会発足時の唱歌科調査員であった村岡旻は「あの部屋に机を並べてゐた人達の、誰を思ひ出しても微笑まずにはゐられない。それほどお互いが単純で明るかった。」と回想している。（南満洲鉄道教育会教科書編輯部1932:30-31）

13　『南満教育』（1925）６月号「教科書編輯部便り」によれば、唱歌科編輯委員は歌曲担当と歌詞担当の委員で構成されている。主査：編輯部編輯員・大連日本橋小学校訓導（歌曲）園山民平、委員：旅順高等女学校教諭（歌曲）・島田英雄、委員：鞍山中学校長（歌詞）矢澤邦彦、委員：編輯部編輯員・教育研究所講師（歌詞）赤塚吉次郎。

島田英雄はさまざまな演奏形態の西洋音楽が受容される時期に専門教育を受けて[14]、1905年に東京音楽学校を卒業（声楽部）、1909年に研究科（オーボエ）を修了した。そののちは東京の中学校と高等女学校の数校で教鞭をとりながら演奏活動をつづけ、1920年に関東洲の官立旅順高等女学校教諭として赴任した。そして、旅順では中学校の唱歌科の教育も嘱託され（島田1933）、地域の中等教育（男・女）に尽力しながら、満洲独自の教科書編輯委員として唱歌科教科書編集に携わった。また、園山民平は島根県立師範学校を卒業後、東京音楽学校甲種師範科に進学、1910年に卒業後は研究科で作曲を学んだ。1911年に沖縄県立師範学校、1912年からは宮崎県立高等女学校で教鞭をとりながら、児童のための唱歌集や行進曲集、唱歌教育に関する著作を出版している。1922年の渡満後は教科書編輯部編輯委員として多くの満洲唱歌を作曲し、関東洲と満鉄の学事を視察する官職の視学や私立大連音楽学校の校長（1924年創立）としても活躍した（三島2012）。こうした略歴が示すように島田と園山はともに有能な教師であり、渡満の時期にはすでに指導的な立場にあった人物である。

満洲の教科書編集が内地と大きく異なっているのは、まさにこうした人選にある。文部省編纂の『尋常小学唱歌集』が帝国大学と東京音楽学校教授の共同に依っていたことに対して、満洲では編輯委員の人選に教育現場本位の方針を貫き、その編輯委員の自由裁量をも保障している。ふたりの唱歌科編集委員が関東庁に起用された時期（島田は1920年、園山は1922年）は内地では「赤い鳥運動」が全国的に広がる最中であったから、気鋭の文学者や作曲家、画家たちが芸術教育の重要性を語り、子どもたちのための新しい童謡が歓迎される時代の流れを、彼らは身を以て知っていたはずだ。そうした内地での経験に加えて、満洲独自の教科書編集が時代と地域社会に見合った教育内容の選定を目標にしていたことから、作成された教材には、当時の音楽界や教育界の動向が内地よりも強く反映されていることが予測される。

こうした点を踏まえて、本研究では満洲独自の唱歌科教科書研究から内地の教育との関連や外地での地域教育の特徴を抽出し、さらにそれらの結果を大正新教育が目指した児童中心や自学自習の観点から検討した。そして同時に、満洲の唱歌教育の実態と受容をみるために、満洲の学校教育経験者を対象に当時の生活と教育に関する調査をおこなった。満洲の学校教育は日本の敗戦によって断絶し、独自の歌唱教材の学習経験は個人の記憶の中にとどめられるか、同窓会や同郷会で共有されるにすぎなかった。しかしながら、手記や聞き取り調査に見る満洲唱歌の記憶は個人の内面と音楽の関係のあり方を示唆しており、ことばには重みがあった。歌につながる満洲の自然や文化、生活の記憶はアイデンティティと関連しており、そのなかには支配――被支配の観点では回収できないものがあったのである。幸いなこと

14　島田英雄は東京音楽学校在学中の1903年、日本初の歌劇上演（グルック作曲《オルフォイス》）に牧女牧童の合唱の一員として参加しており、学生だけで編成できるようになった学内オーケストラの一員でもあった。そして、卒業演奏会（1905）での島田のオーボエ独奏は、現存する日本初のオーボエ演奏記録である。

に、満洲育ちの９人の方の協力を得ることができたので、満洲の唱歌教育の受容の調査から、制度や教育課程などの教育規定の研究では見えにくい教師と子どもたちの意識の変化をたどってみた。調査や分析に際して植民地のヘゲモニーを考慮しないわけではないが、当時の教師と子どもたちの意識を被覆しないように、戦間期に関東洲の都市で生活し、教科書編集に携わった人物と学習者の視点を重視した。

序章　研究の意義と目的

第１節　満洲独自の補充教科書編集とその社会的背景

唱歌科を含む補充教科書編集は、日本の大陸政策の具体的で実際的な展開方法のひとつである。

日本の対アジア外交は明治初期から強硬であったが、第一次世界大戦中（1914–1919）には中国に対して二十一カ条の要求（1915）をし、南満洲の租借期限の延長や山東省のドイツ利権の継承等を承認させた。また、ロシアが国内の革命のために戦線を離脱した後には、孤立したチェコスロヴァキア軍救援を名目にシベリアに出兵（1918）し、大戦終了後も駐留を続けた。

ところが、第一次世界大戦後の欧州では「戦争違法化」を国際連盟の前文に掲げるほど平和希求が強く、他国との共存関係の構築を目指していたので、日本の強引な対外政策は国際社会から非難を受けるようになった[15]。また、朝鮮や中国国内の排日運動も激しかった[16]。原内閣はこうした情勢に鑑み、満洲の権益を守る融和策として日本の非侵略の表明と中国側の被侵略意識の払拭を目的に満洲の社会体制の変更をおこない、1919 年４月に軍と民政は分離され、1906 年から置かれていた関東都督府は民政を担当する関東庁に改組された。

中国に対する二十一カ条要求によって租借期間[17]が延長されると、南満洲都市部の日本人人口は増大[18]するようになった。それにともなって「満支其の他の民族と協調融和を必要とする特殊の地域」（南満洲教育会教科書編輯部 1932：６、編集部長・関東庁内務局長日下辰太）に生まれ、その地で育つ子どもたちの数も増えたので[19]、「地方的郷土的教材を蒐録した教科書の必要」（同掲書：97）性はますます高くなった。生活の現実は複雑で、官公吏や満鉄社員の転勤では、関東洲と満鉄付属地でそれぞれ独自に用いられていた教科書の違いが、転校

15　こうした非難の背後には、黄禍論（黄色人種警戒論）の影響もあると考えられる。
16　大きな排日運動としては、1919 年３月の朝鮮の三・一運動と中国の五四運動（1919 年５月）が知られるが、1920 代になると満洲でも排日運動や排日貨運動（日本製品不買運動）が起こり、教育権回収運動や旅大回収運動と重なって拡大している。
17　日本の租借期間は当初 25 年（日露講和条約 1905）であったが、中国に対する二十一カ条要求（1915）によって 99 年に延長された（南満及ビ東蒙ニ関スル日支協定）。
18　大連市の日本人人口は 1911（大正元）年から教科書編輯部が設立された 1922 年の間に、32,862 人から 55,139 人に、他の民族を加えた総人口数は 55,888 人から 145,684 人に増加している。（井上編 1936：15–16）
19　満洲生まれの子どもの数は増加の一途をたどり、大連伏見台尋常高等小学校の例では、1926（昭和元）年を境に「満洲」生まれの生徒が「内地」生まれの生徒より多くなる。（竹中 2000：102）

した子どもたちを困惑させていた（南満洲教育会教科書編輯部1932：21、97）。

さらに、こうした学校の問題だけではなく、子どもたちを取り巻く環境には社会教育の観点からも問題があった。日本人も「植民地という環境で暮らすうちに、…道徳的価値観が揺らぐことも多かったようで…一部の保護者達は中国人を見ると泥棒よばわりし、街では巡査が中国人を理由なくなぐる光景が日常的に見られた[20]」（竹中2000a：109）。また、「まんごろ」・「満洲ごろ」[21]と呼ばれた日本人無頼漢の行為には同胞も不快感を持っていた。そして、いうまでもなく、朝鮮や中国で起こった排日運動に対しては無関心ではいられなかったはずだ。

このような社会の現実の中で育つ日本人子女に対して、「我民族の優秀性を保持しながら、如何にして在満土著（ヅ）［「着」カ…筆者］心を養成すべきか。内地適用の国定教科書を用ひながら、如何なる特別教材を按排して、画一教育の弊害を防ぐべきか。…などといふことが、最重要且緊切なる問題」（南満洲教育会教科書編輯部1932：13教科書編輯部理事・満鉄学務課長法貴慶次郎）として議論され、「此環境に適応し地方的特色の豊かなる教材を以てするにあらざれば、将来満蒙に活躍する有為の人物を養うには尚不十分」（同掲書：９教科書編輯部理事・満鉄学務課長有賀庫吉）として、独自の教科書編集の必要性が主張されるようになるのは必然的な流れでもあった。満洲に生きる日本人には、他民族との平和共存のためにも、国民アイデンティティとは異なる新たな文化アイデンティティ形成と共同体の秩序の創生が不可欠であったのである。

こうして始まった教科書編集事業について、初代編集長津久井徳次郎（関東庁所属）は「極東の平和の基（モト）はこゝよりと心雄々しく書（ふみ）をあみてむ」（南満洲教育会教科書編輯部1932：19）とその矜持を詠んでいる。

そして、実際の作業は教職経験豊かな専任の編輯委員をはじめ、編輯委員や調査委員を兼任した現職教師集団の献身的な努力によったことが、教科書編輯部設立十周年記念誌のなかにうかがえる。歌詞と日本語科を兼務する編輯委員であった今永茂（関東庁）は次に掲げる寄稿「私たちの生活を歌う」のなかに、編集の苦労と喜びを率直につづっている。

20　手記や同郷誌にみる満洲の日常は、今日の想像を超えたものがある。

（撫順の満鉄社宅街では…筆者注）…窓に厳重にはめ込まれた鉄格子…二階以上にはなかったが徹底した防犯体制が伺える。だが、屋外の物はよく盗難にあった。洗濯物は生乾きの儘なくなった。寝具、衣類等を陽に干していて盗られた話もきいた。子供の三輪車、玩具等を庭に放置して仕舞い忘れると朝消えている事は珍しくなかった。（東京撫順会2012：41）

こうした日常生活における日本人と中国人の経済格差は歴然であり、さらに「電車は日本人用と満洲人用に区別されていた。朝鮮人は日本人に準じていた。我々は物心ついた時には、既にその様な状態が形成されていたので殊更、奇異な感じはしなかった（東京撫順会2012：17）」という。しかし後年、子ども同士で群れ遊ぶ中で聞き覚えた中国語のはやしことばの内容が、侮蔑に他ならなかったことに痛みを覚える記述は多くみられる。（同掲書：６、44）、（藤森2013：76-77）

21　「ごろ」とは「ごろつき」の略で、接尾語的に用いられている。

私たちの生活を歌ふ

今永　茂

しんじゅ[22]樹蔭に雀が啼いて　　昼も静かな編輯部。
純な心でひもとく児らを　　胸に描いてペンを取る。
原稿書きつゝしみじみ思ふ　　重いつとめをそのせめを。
三度四度五度書きかへかへて　　今日も空しう日が暮れる。
こんな苦しみ誰ゆゑ嘗めよう　　こんな苦しみ誰が知らう。
インク新たのご本を開き　　生みの親なるいゝ心地。
胸がをどるよ可愛いゝ児らの　　学ぶ姿をしのぶとき。
のぞみ新たのご本に載せて　　送る心のさわやかさ。
教室（せき）に入ったら私の作と　　知らぬみんなが読んでゐた。
聞くも嬉しい夕暮道の　　あれよあの歌我が歌よ。

（南満洲教育会教科書編輯部 1932：69-71）

教科書編輯部は大連市内にあったが、現職の教師が集う困難性や勤務校の職務に重なる負担など、多くの苦労があったことは想像に難くない。それにもかかわらず、教科書編集作業は編輯委員たちの強い使命感[23]と自負に支えられて遂行された。石森延男（関東庁所属、国語・日本語・歌詞担当編輯委員）はそうした思いを詞に詠い、園山民平（唱歌科編輯委員主査）は歌に書き上げている。

《教科書編輯部の歌》

一　樗（しんじゅ）の花の　咲くころは、りっぱな本を　つくらうと、
　　くるしみながらに　筆をとり、こゝの子どもに　あふやうに、ためになるよな　お話を。
二　樗の木の葉　散るころは、きれいな本をつくらうと、
　　印刷がかりは　大童、朝から晩まで　校正を、ちっともま違ひ　ないやうに。
三　樗の木の芽　ふくころは、みごとな本が　でき上り、
　　かはいゝ子どもに　手わたして、 日本の子どもも　喜んで、満洲の子どもも　喜んで。

（南満洲教育会教科書編輯部 1932：１）

22 「しんじゅ」は「樗」、「神樹」とも表記する。中国北部原産のニガキの落葉高木で、「にわうるし」の別名をもつが、ウルシとは別種である。成長が早く、並木や庭木にされることから、教科書編輯部近辺の街路樹であったと考えられる。

23 1924 年の冬、渡満して間もない今永茂（関東庁所属、国語科・日本語科担当編集委員）は大連の路面電車の車内から、軌道前方に近づいた支那馬車の馭者が無抵抗のまま、日本人車掌に激しく打擲されるのを目撃した。今永は「言ひ知れぬ寂しさに禁（マゝ。耐ヵ…筆者注）へられなかった」と回想ながら、植民地における日本人教育に対して「衆多の範として国際的協調の第一線に立つの覚悟がなくてはならぬ」と強い決意を表明している。（南満洲教育会 1925：８月号 22-25）

国語科・唱歌科担当編輯委員が残した詩や歌のなかには編集の重責の苦しみと共に子どもたちの笑顔や歌声が謳われて、教育に対する理想主義的な情熱がそのまま残されている。満洲独自の教科書編集という官民一体の事業には、経験者を含めた教師集団が主体的に関与していたことは明らかであり、満洲の唱歌科教科書は、気鋭の作曲家や実績のある国語科・唱歌科教師が参画した西洋音楽の社会化の例としてみることもできるだろう。大正期の満洲には帝国大学のように権威の集中する場がなく、土地の名望家もいなかったために実績のある現職教師が編輯委員として活躍することができた。こうした編輯委員のヴォランタリズムによって編集された唱歌科教科書には、大正から昭和初期の倫理や文化を含む中産階級知識人の意識が取り込まれていることが推測される。

第２節　満洲の日本人学校用教科書に関する先行研究と本研究の意義

唱歌教育を含む満洲の教育については植民地教育史のなかで研究が重ねられており、日本人教育の特色としては独自の補充教科書の使用と中国語教育が挙げられている（槻木 2000：199-202）。さらに、日本人学校の教育の制度や方針には当初から地域差があったことが指摘されている。満洲の日本人教育は国際政治や異文化社会との接触の問題と無関係ではありえず、関東洲が租借地という日本領土内の日本人学校であったのに対して、満鉄付属地では中国人社会の中の日本人学校であったという環境の違いが大きく影響している（同掲書：193-199、202-210）とされている。

満洲の日本人教育にはこうした特殊性があるものの、内地の教育と関連していたことも報告されている。満洲の教育の特徴を内地の教育と比較した磯田一雄は、満洲の補充教科書編集が新教育運動の一端として内地の教育改造運動と連動していること、また、編集方針の現地適応主義の背景には内地との生活環境の違いだけではなく、満洲がアジア諸民族支配の壮大な実験場であり、その後の「大東亜共栄圏」構想の原点であったという政治的側面を指摘している（磯田 2000a：214-215）。そして、そうした社会的な力学の作用によって、教科書編集が満洲事変・満洲国建国を分水嶺として、現地適応主義や国際理解主義から帝国の第一線としての性格に傾斜し、政治情勢が教科書編集に結びついていることを満洲の教科書の特徴とした（同掲書：216-229）。さらに槻木瑞生は教育目標の検討から、1932 年の満洲国建国宣言後は関東洲以外の在満日本人の教育目標には日本精神の涵養と満洲国建国の精神の体得が並立してかかげられたために、在満日本人は日本帝国臣民として軍事的責務を負うことになり、戦時体制に組み込まれていった（槻木 2000：204-211）ことを明らかにした。

唱歌科教科書の研究では、磯田は『満洲唱歌集』の特徴を内地の『尋常小学唱歌集』との比較から概観し、満洲唱歌の歌詞内容が「在満日本人の都市での快適な日常生活」をうたっ

ている（磯田 2000b：164）こと、そして 4 期（1924 年から 1944 年[24]）にわたる教科書編集の改訂内容の調査から、後に採択、編入された新曲が社会情勢の変化と関連していることを明らかにした（磯田 2000b：150-152、161-168）。さらに磯田は国語と国史の教科書研究から、満洲の植民地教育が新教育と関連し、満洲を題材とした教材が内地へ還流しており（磯田 1999）、教育の領域においても満洲は内地の実験的な場であったことを示した。

また、唱歌科の教育内容に関しては、関東洲の小学校では内地の『尋常小学唱歌集』『祝日大祭日唱歌集』を教科書とした必修科目であり、1918 年頃は内地の新曲の童謡が好まれていたこと、1921 年頃からは各小学校でレコードによる音楽鑑賞会が開かれるようになり、1924 年には副読本として『満洲唱歌集』や『視唱教本』が発行され（1930 年には正規の教科書として認定）、読譜力の養成も重視されていた（編著者不明 1932：140-146）[25] とする記録がある。

さらに、こうした資料に基づく研究ではほとんど扱われていなかった満洲唱歌の受容については、喜多由浩（2003）が満洲育ちの方々に聞き取り調査をおこない、これまで内地では知られていなかった満洲唱歌の存在を知らしめた。喜多は新聞読者の愛唱歌《わたしたち》の投稿記事に端を発した満洲唱歌への関心から、満洲唱歌集の成り立ちや満洲の教育について取材をし、当時の生活や満洲唱歌の思い出を中心とした聞き取りをまとめた（喜多 2003）。この聞き取り調査は在満日本人の体験というだけではなく、音楽と個人の内面の関係についての証言としても貴重である。

しかし、満洲唱歌集の制作が「自由」で「豊か」な満洲で可能になった有能な人材の活躍に依ると読みとれることや、満洲唱歌をめぐる思い出に郷愁が強調されていることにはすでに疑問が呈されている（日本植民地教育史研究会 2007：208-210）。聞き取り調査の結果の検証と相対化は、研究の必要条件として重視したい。

ここで、上記の日本人教育に関する先行研究を概観すると、国定教科書の補充を目的にした教科書編集事業は新教育思想を志向しており、南満洲全域の日本人子女の教育の改良を目ざした壮大な計画であったことがうかがえる。また、実力のある現職教師を編輯委員として招集して作成された教科書の研究からは、新教育思想に内在していた帝国的膨張主義などの問題や、満洲と内地の教育界とのつながりも確認されている。

しかし、歌が「国民的」な知覚様式や世界観を形成する手段として期待されていたとする知見（山東 2008）[26] に向き合って、満洲の唱歌教育を新教育の観点から詳しく分析した研究や満洲の唱歌教育と在満日本人の生活や文化概念、社会意識との関連について検討した論考

24　ただし、第三期と第四期の教科書は一部しかみつかっていない（磯田 2000：152）とされている。
25　この調査には、竹中憲一（2000a）『「満州」における教育の基礎的研究』に負うところが多い。竹中は法規や関東洲と満鉄付属地の教育史、教育機関誌、記念誌、統計などの資料に基づいて、日本人子女の教育のための法律や主要な教育機関の状況、教育内容を概説し、典拠を明示している。
26　山東功（2008）4 章・6 章にくわしい。

は見当たらない。満洲の学校教育の経験は戦前の外地の日本人教育としても、多くの示唆を含んでいるはずだ。満洲独自の唱歌を歌って育った人たちの回想には音楽教育の観点からも注目すべき内容が含まれており、その多くには音楽とアイデンティティの問題が内在している。満洲で教育を受けた人びとは敗戦によって故郷から切り離された存在となり、国民アイデンティティと文化アイデンティティが単一と信じられていた内地に、無防備なままで参入を余儀なくされた。内地とは異なる文化アイデンティティを持ち、引き揚げ者として冷遇された人びとの当惑は想像に難くない。それゆえに、満洲の唱歌教育の記憶のなかからは、集団的な敗北と喪失を経験した人たちと歌の関係につながるものが見つかる可能性がある。

本論の中心である教科書研究は、内地の思潮との関係と満洲の教育事情の抽出のふたつの観点から進めた。まず、内地との関連では当時の教育思潮や日本語のヴォカリゼーションに関心を寄せていた音楽界の気運に照らし、満洲の教育の独自性は「教育実際家」であった編輯委員の自己了解と内省に注目しながら分析した。そして、受容の調査では、歌の記憶と満洲の生活経験とのつながりを重視して検討した。

独自に編集された唱歌科教科書の内容と受容の調査から、内地では規制され、減衰していった大正新教育に内在していた可能性（あるいは限界）を見届けたい。

第１章　声とことばのメディア性とその受容

教科書調査には、戦後に復刻された三種の『満洲唱歌集』の中からもっとも充実した内容のものを選び、当時の教育界にあった声とことばのメディア性への関心と、教科書内容の関連を見ていった。唱歌教育の受容の調査には知己とその友人や親族の協力をお願いした。

第１節　調査の対象

教科書調査の対象は、大正末期から日中戦争開始までの第一期・第二期の唱歌科教科書とし、『在満日本人学校用教科書集成』第７巻（磯田・槻木・竹中・金編 2000）に収められている『視唱教本』と『満洲唱歌集』を用いた。

さらに、南満洲都市部の進学率が非常に高かった[27]ことから、唱歌科の学習目標を連続的にたどることで明確化できると考えて、『満洲唱歌集』高等小学第一学年用（1938）と『満

27　関東洲の進学率について、竹中憲一は1922年から1931年の学事統計資料から96.9％を算出している。満鉄の学事統計資料（1923）では67.5％となり、尋常小学校を卒業後に就職する生徒は少数であったことがわかる。こうした傾向は旧在満日本人の記憶の中にも確認でき、手記には「小学校を卒業すれば女学校へ行く、というのを当たり前のように考えていた」（藤森 2013：282）、同郷誌には「高校進学率が九十何パーセントかになったと報ぜられている（1984年当時…筆者注）が、そんな事は撫順では半世紀も前に実現していた」とあり、聞き取り調査においても満洲都市部の進学率は高かった。

ほとんどみんなが中学に進学した。大連には高等小学校もあったが、僕らの組から行った人間はいたかなあ。（大連：太田豊さん 2011）

進学率は高かったですよ。学校によっては100パーセントのところもあったと思います。（新京・哈爾濱：吉岡数子さん 2010）

洲新中等唱歌』巻一・巻二（1937）も参照した。

満洲の唱歌教育の受容に関しては満洲で育った人の手記や同郷会誌の調査に加え、敗戦時に小学校（国民学校）六年生以上の年齢であった９人（生年：1923 年、1926 年、1927 年：３人、1930 年、1931 年、1932 年：２人）に満洲の唱歌教育と生活についての質問紙調査を、さらにそのうちの５人に聞き取り調査を依頼した。９人の協力者の小学校在学の時期は、第一期・第二期の教科書が刊行された時期と完全には一致しないが、満洲唱歌の学習が学校内にとどまらず、家庭内では兄姉から、遊びのなかでは上級生・友人・知人などからの聞き覚えでも親しまれていたこと、さらに唱歌科教科書の内容が大きく変更された第三期以降にも教室内に『満洲唱歌集』が常備され、授業で使われていた（吉岡数子さん 2010）ケースがあることから、全員を満洲唱歌の学習経験者と見做しても妥当であると判断した。

研究の方法としては、複数の分析法を併用しながら、満洲と内地の唱歌科教科書と比較することで満洲の唱歌教育の先進性や独自性をみていく手法を考えた。また、満洲の唱歌教育の内容とその影響については質問紙調査を計画した。

しかし、満洲の教科書編集の特徴は、各科の編輯委員が有能な現職教師（あるいは経験者）であっただけではなく、全員が満洲の都市に居住する生活者で、満洲の暮らしの現実を肌身で体験していること[28]にある。中国の都市で目にする風景や色、街の中で聞こえる音や声、そして匂いや寒気、黄砂など、外地で覚醒した感性のあり方は満洲の新しい唱歌科教材の作詞や作曲にも影響したに違いない。そこで、教材の内容を創作の立場から評価するために、この時期までの歌のメディア性に関する議論の動向を参照しながら分析の尺度を決めた。

第２節　国民形成のメディアとしての声とことば

内地の唱歌教育を設立の時期にさかのぼっていくと、唱歌科は主権国家の国語教育の一翼を担うことを期待（目賀田：1878）された科目であった（山東：2008、奥中：2008）ことがわかる。ことばが国民形成の役割をもつことは早くから認識されており[29]、国内のことばの統一は主権国家形成の喫緊の課題であった。ことにお国訛りの存在するはなしことばは発音の標準化を必要としており、声による正確で円滑な情報伝達は広域化する経済活動や軍隊の指揮のためには不可欠のことであった。読本科の五十音練習、唱歌科の発音・発声練習

28　唱歌科主査であった園山民平は、満洲の土地に根差した新しい歌は、満洲の生活を知る者によって作られるべきだと考えていた。このことは、教材作成を内地の名家・名作曲家に委嘱する、としていた当初の編集方針に対する反論の中に明確にみられる。

…満蒙の景物に接触しない内地の名家が、果たして真に満洲の子供に適した郷土材料を作成する事が出来るかどうか、という疑問をいだいた…（南満洲教育会教科書編輯部 1932：48）

29　唱歌教育設立に尽力した目賀田種太郎は、文部大輔田中不二麿に宛てた私信「我公学ニ唱歌ノ課ヲ興ス仕方ニ付私ノ見込」（1878 年 4 月 20 日付）のなかで「……抑公学ノ大要ハ人ノ其ノ平生ノ要務ヲ達セシムル様ニ教フルニアリ、斯ク教フルニ緊要ナル学課ハ国語ヲ舌モテ又筆モテ正シク用ヰルト数学ノ大要トニ可有之ト存候、……」とし、同年、メーソンに宛てた手紙にも同様の意見を記している。「……As I understand the chief design of the public school , is to prepare men for their ordinary business of life , and the most important studies to be taught are the correct use of the language with tongue and pen and fundamental processes of mathematics ……」（「メーソン推賞其他ニ関する目賀田意見（英文）」）（『目賀田種太郎関係文書』東京芸術大学図書館蔵）

（ア―エ―イ―オ―ウ）や音階練習（音の高低関係の理解と制御）は日本語の声の標準化のための具体策でもあった（平尾 2013：149）。そして、その後も唱歌教育が国語教育と関連づけられていたことは、文部省検定による最初の唱歌集が『小学読本』の韻文に歌詞を採った『読本唱歌集』であったことからも明らかである。

一方、明治期の国語教育では書きことばの統一によるコミュニケーションを目的に読み書きが重視されていたが、大正期の読本教育では文字の読み方学習にとどまらず朗読法が研究されるようになり、文章や詩歌の内容を正確にわかりやすく伝達するための分節化の技法であるアタック、ブレス、ポーズの指導にも注意が向けられていく[30]（福岡女子師範学校附属小学校国語部 a 1925：B－四・六）。明治の学制頒布後に始まった読方の教育では『童蒙必読単語篇』などの訓読の高唱を中心に[31]、「文字語句の形式尊重」を目的とするものであったが、しだいに「思想感情意志を表現する基礎的能力の涵養」（福岡女子師範学校附属小学校国語部 b 1925：１）に意識が向けられるようになっている。

唱歌教育においてもことばに対する関心は高く、東京高等師範学校で附属小学校訓導を兼任していた田村寅蔵（1873-1943）と学習院の納所弁次郎（1865-1936）の作曲、東京高等師範学校同僚の石原和三郎（1865-1922）、田邊友三郎の作詞による『教科適応幼年唱歌』（1900 年）は言文一致の唱歌であった。田村らは、最初期の唱歌科教科書であった『小学唱歌集』の難解な文語の歌詞や子どもの心情に合わない旋律を批判[32]し、現職教師としての実践経験と子どもを子どもとしてとらえる児童観に基づいて、ことば（日常語）、歌詞内容、旋律を子どものまなざしで創作した。さらに 1918 年に雑誌「赤い鳥」を創刊した鈴木三重吉の子どもたちの素朴な感情を尊重した活動は、作家、作曲家、画家にも広く支持された。誌上に掲載された新しい童話・童謡の人気の高さは、翻って旧来の小学校の綴り方、唱歌、図画の教育内容や教育方法の批判ともなり、ことばや声を介した個人の内的現実の表現や伝達性が重視されるようになった（山本 2014：234-237）。

こうした思潮の流れの中で、大正末期には歌唱指導も変化している。母音の多い日本語をわかりやすく、美しく響かせるために「ン」や促音を自然なレガートで歌う方法（草川 1924： 201-202、204-205）や、歌詞の意味や情感を伝えるためにアタック、ブレス、ポーズを意識する必要についても言及（草川 1924：85、306-307）されるようになっている。

---

30 「B-四、アクセント」の項では「理想としては東京の標準アクセントにする。当分は当地のアクセントによっては？朗読のアクセントは単語のアクセントではなく文のアクセントであってほしい」、「六、音の休み」では「読点は半息　句点は一息　節の終りは一息半位の心持で音を休む」など、具体的な提言がなされている。

31 1872 年の文部省「小学教則概表」によれば、下等小学（六歳から十歳）の学習内容は「洋法算術」以外はすべて国語学習に関するものになっている。科目名は、綴字、習字、単語読方、洋法算術、修身口授、単語韻誦、会話読方、単語書取、読本読方、会話韻誦、地理読方、養生口授、読本輪講、地理学輪講、窮理学輪講、書牘、各科温習。（文部省『学制五十年史』1922：39-40）

32 こうした子ども中心の意見は唱歌教育の初期から存在はしており、伊澤修二は『小学唱歌』（1892 年）の冒頭に子どものことばで書かれた《おほわた》《ゑのころ》を配置している。さらに、言文一致唱歌の嚆矢としては明治 34 年発刊の『幼稚園唱歌集』があげられ、東くめの作詞と滝廉太郎の作曲による《水あそび》、《お正月》などは今日でも愛唱されている。

これらの内地の指導方法や歌唱観は、満洲と内地の教師に交流や移動が確認できることから、満洲の唱歌教育にも接続されたと考えられる。そこで、満洲の唱歌科教科書の調査と分析では、『満洲唱歌集』を日本語のヴォカリゼーションの観点から概観し、大正期の新教育のトピックに照らして、評価の観点を求めた。

大正から昭和初期にかけての唱歌の指導方法の内容は耳で聞いてわかる歌唱が求められていたことを示唆しているので、大正期の童謡や唱歌に関する議論を参照しながら歌詞の分節化に注目し、尺度を設定[33]した。分析の尺度としては、唱歌科編輯委員が曲作りに苦心したであろう要点――修辞法（文体（口語調か文語調か）、声喩（オノマトペの有無）、形式（ことばの反復、対句・平行）、主体とそのまなざし、ことばのリズム（等時性、特殊拍などのリズムの書法）、ことばと旋律の関係、旋律の特徴（終止、拍子、音域、速度）――を設定し、日本語のヴォカリゼーションの観点から『満洲唱歌集』の歌の分析をおこなった。

また、『満洲唱歌集』のなかに、満洲の生活の中で耳にした中国の音や声、ことばや気候、風景と向き合って作品化された曲が多く含まれていることに着目して、満洲唱歌のメディア性を検討し、さらに歌詞に埋め込まれた価値観の抽出を試みた。在満日本人社会の創出や「民族協調」を編集方針として作成された満洲唱歌には、編輯委員が共有していた社会意識が抽象化されて内在すると考えられるので、それらを歌詞の内容分析によって見ていった。

まず、『満洲唱歌集』の歌詞のなかで謳われている人物に着目して選曲し、性別と国・民族[34]の別に文意と表象内容をみた。そして、この内容分析の結果から恣意性を排除するために、定量テキスト分析を併用し、結果を文献調査[35]によって検証した。定量テキスト分析では全曲の歌詞から頻出語を抽出し、頻出語を中心にしたキーワードの語と語のつながりを追うことで、満洲唱歌に内在する編輯委員の関心や理念をみていった。

第３節　唱歌教育の受容

内地の唱歌教育研究で取り上げられている事柄について、質問紙調査と聞き取り調査をおこなった。質問紙調査の内容は、唱歌の学習方法、読譜指導、合唱経験、儀式唱歌、鑑賞、朝礼時の歌唱、はやり歌を含む愛唱歌、唱歌教育の思い出についての項目に加え、学校の教育設備や教育環境、満洲の生活についての自由記述を含み、聞き取り調査ではそれらの結果の補足を行った。

33　この尺度の設定には金田一春彦（1995）『童謡・唱歌の世界』、秋岡陽（2003）『自分の歌をさがす――西洋の音楽と日本の歌』で指摘されている問題を参考にした。
34　国・民族別の分析では歌詞に表れた人物だけではなく、曲名に国や民族の名称が用いられているものを含めた。
35　同時期に刊行された教科書である『満洲補充読本』、『満洲地理・歴史資料集』、満洲育ちの方の手記、同郷誌（東京撫順会）、機関誌（南満洲教育会『南満教育』）、同窓会関係資料（旅順高等女学校、大連弥生高等女学校、撫順高等女学校）、満鉄・関東庁の史料（『満鉄付属地経営沿革全史』上巻、『関東州教育史』第二輯）を参照した。

しかし、調査の協力者の出身地に偏りがあって、関東洲と満鉄付属地の教育内容にかなりの違いが確認されるのにもかかわらず、満鉄付属地で育った方にはひとりしか会うことができなかった。それゆえ、この調査は音楽教育の問題として重要な課題を含むが、地域差に言及するには事例数の差が大きすぎるので、本稿ではその重要性を指摘するにとどめる。

第２章　教科書調査の結果

調査結果を先に述べると、満洲独自の唱歌科教科書には、大正新教育で高唱された児童中心主義や自学自習、郷土教育などがさまざまな形で具体化されていた。これは、当初の教科書編集事業が国定教科書の補充を目的としていたことの当然の帰結ではあるが、新しく作られた満洲の子どもたちのための歌である「満洲唱歌」は、この後、内地で人気のあった「童謡」が退潮していったこととは異なる経緯をたどることになる。

内地の「童謡」は子どもたちに歓迎されたが、教育関係者からは「安価な感傷美」として批判され（小学教育研究会 1930：305）、1931年には文部当局によって学校から排斥される。しかし、『満洲唱歌集』は関東庁によって正規の唱歌科教科書に指定（関東庁告示第52号 1930）されていたので、「満洲唱歌」のかずかずは教科書の歌として歌い継がれることになったのである。

では、こうした内地とは異なる唱歌科教科書の内容を、三つの観点――内地の教育思潮との関係や日本語のヴォカリゼーションとしてのわかりやすさ、さらに、満洲の生活から紡ぎだされた歌詞の特徴――から見ていこう。

第１節　内地の教育思潮との関係

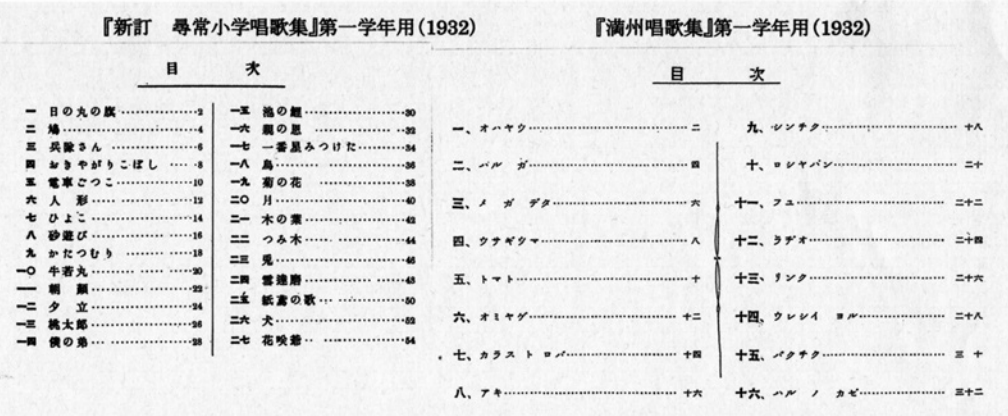
満洲独自の唱歌科教科書の特徴を、当時の内地の教育界や音楽界の関心に照らしながら見ていく。まず、新教育のトピック――自学自習・児童中心――が唱歌科教科書であった『満洲唱歌集』と『視唱教本』のなかにどのように表れているか、さらに当時の音楽界と教育界が共有していた新しい日本語の歌への意欲がどのように作品化されているか、内地の唱歌科教科書との比較から検討した。

第１項　新教育

１）自学自習

①　編集の工夫

『満洲唱歌集』の目次は、第一期から子どもが自分で読めるようにすべての曲目が仮名で表記され、自学自習への配慮がなされている（図１右側）。


『新訂　尋常小学唱歌集』第一学年用（1932）

目　次

一　日の丸の旗……2
二　鳩……4
三　兵隊さん……6
四　おきやがりこぼし……8
五　電車ごっこ……10
六　人　形……12
七　ひよこ……14
八　砂遊び……16
九　かたつむり……18
一〇　牛若丸……20
一一　朝　顔……22
一二　夕　立……24
一三　桃太郎……26
一四　僕の弟……28
一五　池の鯉……30
一六　親の恩……32
一七　一番星みつけた……34
一八　鳥……36
一九　菊の花……38
二〇　月……40
二一　木の葉……42
二二　つみ木……44
二三　兎……46
二四　雲遠廻……48
二五　紙鳶の歌……50
二六　犬……52
二七　花咲爺……54

『満州唱歌集』第一学年用（1932）

目　次

一、オハヤウ……ニ
二、ハル　ガ……四
三、メ　ガ　デタ……六
四、ウナギタマ……八
五、トマト……十
六、オミヤゲ……十二
七、カラス　ト　ロバ……十四
八、アキ……十六
九、シンチク……十八
十、ヨシヤパン……二十
十一、フユ……二十二
十二、ラヂオ……二十四
十三、リンク……二十六
十四、ウレシイ　ヨル……二十八
十五、バクチク……三十
十六、ハル　ノ　カゼ……三十二

図１　目次にみる編集方針の違い
『新訂尋常小学唱歌集』と『満洲唱歌集』

一方、内地の唱歌科教科書では『新訂尋常小学唱歌集』（図１左側）においても、「鳩」「池の鯉」などの漢字が用いられている。ことに「紙鳶の歌」の表記は子どもが一人で読むことは困難であろうと思われることに比べると、同時期の満洲の教科書には児童の心情を尊重し、自発的な学習意欲を引き出して育てるための工夫がなされている。

②　読譜力養成のための『視唱教本　上・下』

自学自習への配慮とは、具体的には子どもたちが小さな成功経験を重ねることによって、「知る」楽しさや「わかる（できる）」喜びを実感できるように課題の難易を調整することである。五線譜の読譜力養成のための教科書である『視唱教本』上巻・下巻の内容には、こうした配慮が随所にみられる。

『視唱教本』は、歌唱指導に際して簡単な数字譜を用いるか五線譜を用いるかの議論の末（1922）に編集された（1930）（編著者不明 1932：191）もので、練習課題は短く、課題のほとんどは二小節で構成され、初歩の楽典の習得も考慮しながら段階を追って丁寧に編集されている。

取り扱われている記号と内容は、上巻では読み方練習が多く、二分音符、四分音符、八分音符、四分休符、付点音符、タイとハ長調の四小節課題、下巻では歌い方練習が多くなり、十六分音符、八分休符、全音符と拍子（4/4、2/4、3/4、6/8）、上拍、スタカットの歌唱法に加えて、ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調の練習課題（八小節か十二小節）になっている。

『視唱教本』の特徴は、すでに出版されていた信時潔訳『コールユーブンゲン』にはみられない「読み方練習」（音高を無視して階名を読むだけの課題）と、「聴き方練習」として「各

音の関係を正確に会得せしむるために楽器にて奏する音を児童自ら階名を考察、歌唱せしむ」（磯田・槻木・竹中・金編 2000：102）課題が含まれていることである。

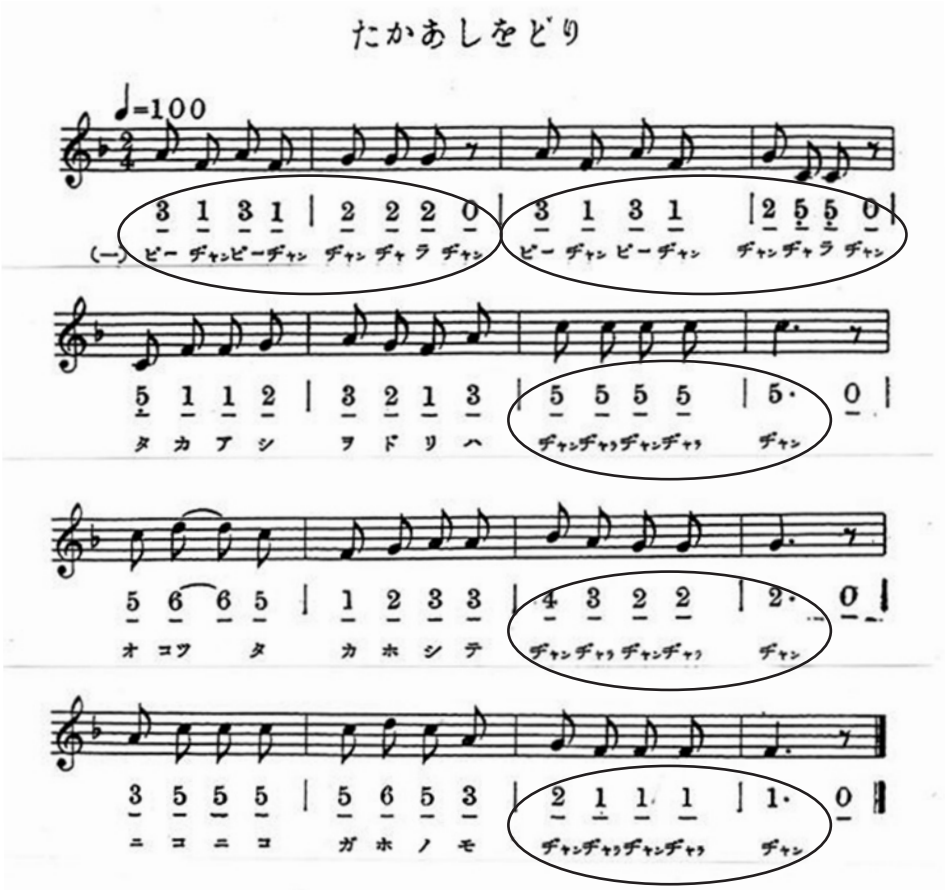
「聴き方練習」は読本教育における聴き方――教師やレコードによる模範朗読の傾聴――の奨励と軌を一にした学習方法である。読本指導では要である標準語が東京の中産階級のことばづかいを基にしていたため、東京以外の土地で標準語の発音やアクセント、イントネーションを習得することは困難であった。そのため、音声としてのことばの標準化は現実的にはラジオ放送やレコード、蓄音機の普及を待たなければならなかった。こうした傾向は、西洋の音階で書かれた唱歌の練習においても同様で、地方の子どもたちは西洋音楽の演奏を聴いた経験がほとんどないのが現実であった。それゆえ、歌の旋律を模倣するときには教師の範唱や容易に音高を確かめられる楽器を奏して、模範となる声や音高をしっかり聞きとる必要があった。聴き方練習は唱歌科における傾聴の訓練である。

こうした『視唱教本』の聴き方、読み方の練習課題は、五線譜をはじめて学習する児童を中心にした発想であり、内容と構成には新教育思想の影響が強く感じられる。

2）児童中心主義

①　親しみやすいことばと内容

歌詞は口語が中心で、小学一学年用から四学年用の教科書には子どもたちが日常で使うはなしことばが多くみられる。さらに、一・二学年用教科書には子どもたちが親しみやすく、直観的理解につながるオノマトペや擬人法がよく用いられて、特徴的である。



譜例１　歌詞にオノマトペが多用された例
第一期『満洲唱歌集』第一・二学年用　1928 年四版　（初版は 1924 年）

譜例１の《たかあしをどり》は縁日や祭りのときに鳴り物入りで登場する高脚踊りを題材とした歌で、子どもたちに人気があった。歌詞の半分以上は「ピーヂャン」、「ヂャンヂャラ」、「ヂャン」などのオノマトペや、ことば遊びのような反復「ノッポノポッポッポ」（二番）で構成されている。オノマトペや擬人法は学年を追うごとにしだいに減少して頭韻や脚韻で整えられた歌詞が多くなり、一行・一節のなかに同じ頭字をもつ語を列記する頭韻や脚韻、対句の双韻が、音声化された日本語の語感を高めている。

また、第一期『満洲唱歌集』の《風》の歌詞では五感を開いて世界と向き合っている子どもの感じ方が大切にされており、嗅覚で感じる風を謳い込んでいる。

《風》

一　風の姿はおもしろい。雪の原のは銀の風。砂の丘のは黄いな風。
　　桃の里では赤い風。草の山では青い風。
二　風のにほひは　をかしいな。夕立風は土くさい。やなぎの風は水くさい。
　　煙突風は炭くさい。電気くさいは煽風機。

第一期『満洲唱歌集』第三・四学年用　1928 年　（初版は 1924 年）

《風》の二番の歌詞にある嗅覚に関わる内容は『尋常小学唱歌集』・『新訂尋常小学唱歌集』の歌詞にはみられず、子どもならではの新鮮な発見を表現したものといえるだろう。このほかにも、満洲唱歌の中には子どもが感じるさまざまな心情が詠われているが、不安や悲しみは間接的な表現法を用いることによって効果的に抑制され、感傷に流れていない。こうした編集方針には、内地の「赤い鳥運動」のなかで歓迎された新しい「童謡」が、教育界や音楽界の識者からは「安価な感傷美」として批判を招き、学校教育からは退けられていった（小学教育研究会編 305：1930）ことが意識されていたのだろう。満洲全域の日本人子女のための教材作成の、真摯な取り組みの様子がしのばれる。

②　生活のことばとしての標準語

満洲唱歌集の歌詞は標準語を基本にして書かれている。低学年用の歌詞にみられる呼びかけには「食べに来い」や「出てこい」などの命令形ではなく「スベッテ　ヨンドイデ」のように対話調のものが多く、童謡にみられるような俗語（「なっちゃって」・「いっちゃった」などの東京方言）は見当たらない。

満洲都市部には日本全国から人が集まっており、原籍地の異なる日本人社会の統合のためには、はなしことばは標準語でなければならなかった。たとえば、商業都市であった大連市在住の日本人の原籍地は全国に広がっており、沖縄、朝鮮、台湾、樺太出身者も含まれている（井上編 1935：24-25）。原籍地の分布状況は学校も同様で、寄宿舎のあった旅順高等女学校の昭和 5 年度卒業生 164 人の原籍地は全国 41 の道府県におよんでいる（旅順高等女学校 1930：卒業生人名簿）。こうした人的環境のなかで営まれる社会生活では、お国訛りや方言による混乱を避けるために標準語によるコミュニケーションが要請されるのは必然であり、標準語は小学校から奨励されていたことが質問紙調査でも確認された。

そして、標準語は満洲以外の外地でも奨励されており、標準語の普及は日本人の海外進出と関連している。

第２項　新しい日本語の歌への意欲

新しい教育思想が内地に広がった時期は、童謡運動がもたらした新しい歌が喜んで受け入れられた時期でもあった。当時の音楽界では耳で聞いてわかる新しい歌づくりが模索されており、著名な作曲家の山田耕筰（1886-1965）が歌曲の作曲に際して、ことばのアクセントを反映させる方法に腐心していたことは、よく知られている。当然ながら、こうした意欲は山田耕筰と同世代で、活動を共にしていた唱歌科編輯委員にも共有されていたはずである。

では、新作である『満洲唱歌集』には、新しい日本語の歌づくりへの意欲はどのように具体化されて表れているのだろうか。歌詞のことばの特徴や「耳で聞いてわかる」工夫――日本語のヴォカリゼーションに対する意識に注目して、五つの観点――芸術教育、音声化された日本語のわかりやすさ、歌詞の構成、国文学の伝統との関連、規範とした音楽――から見ていこう。

１）芸術教育

『満洲唱歌集』は第一期（1924）の緒言から一貫して唱歌が詩と歌が一体化した「歌曲」であることを明言している。『尋常小学唱歌集』（1911）の緒言が「曲譜」「歌詞」の別を取り、『新訂尋常小学唱歌集』（1932）が唱歌を何かを教えるための「教材」としていることよりも、芸術教育の立場が明快である。

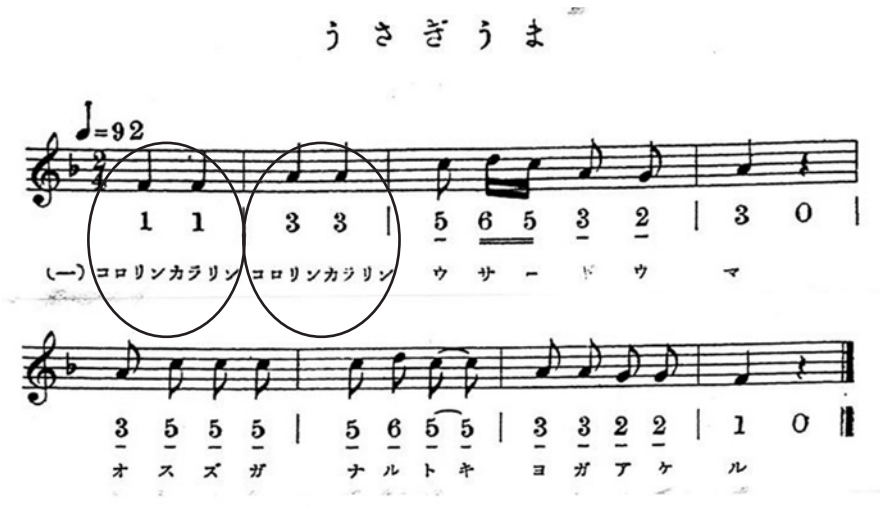
２）音声化された日本語のわかりやすさ

歌詞と旋律の関係では、低学年から高学年になるにつれてはなしことばの等時拍やアクセント、強勢を保ったものから次第に流動化して、旋律的な流れになる傾向がある。

大正期の音楽界では耳で聞いてわかる日本語の歌の創造が課題とされていた[36]が、満洲唱歌にははなしことばのリズム――音節やモーラよりもビート――が活かされ、撥音や促音をレガートで歌う工夫が随所になされている。ことばのビートは語気、語調と結びついており、拍のとらえ方は話し方のスピードによって変化するが、低学年用『満洲唱歌集』の歌詞に多く見られるオノマトペは、ビートを重視した作曲法によって生気を帯びて感じられる。

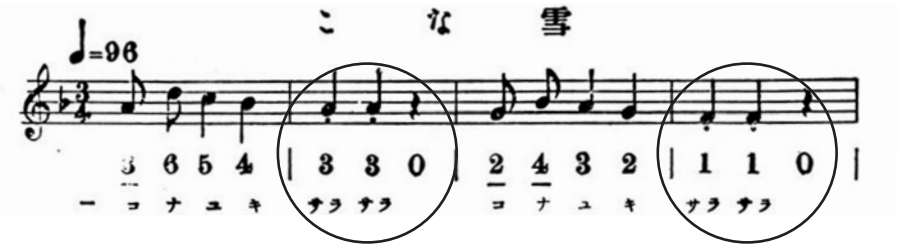
はなしことばのリズムが歌に生かされていることを、譜例２の《うさぎうま》からみてみよう。

36　ことばを変えると、わかりやすい日本語の詩と西洋音楽が融合した新しい歌を創作することである。秋岡陽は山田耕筰と団伊玖磨を例にして、新しい創作の試みについて説明している。（秋岡 2003：70-111）



譜例２　分節化の例－１
第一期『満洲唱歌集』第一・二学年用　1928 年四版　（初版は 1924 年）

「うさぎうま」とは耳の長いロバを童話風に呼んだもので、ロバは満洲の農家の労働を助ける家畜として飼われていた。《うさぎうま》の冒頭には、早朝、粉ひき作業のために曳いていかれるロバの首に着けられた鈴が、歩みに合わせて揺れて鳴る様子が「コロリン、カラリン」と一拍で書かれ、満洲の朝の始まりの音を表している。



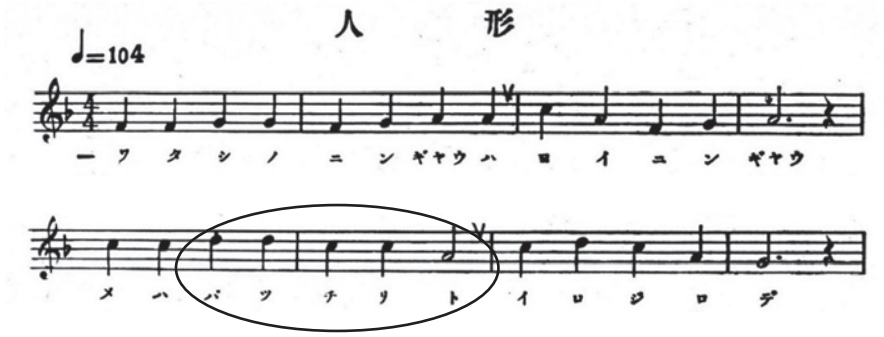
譜例３　分節化の例－２
第一期『満洲唱歌集』第三・四学年用　1932 年八版　（初版は 1926 年）

譜例３の《こな雪》は『満洲補充読本四の巻』（1933 年初版）の韻文がそのまま歌詞に用いられており、受容の質問紙調査においてもよく記憶されていた歌である。冒頭部の「サラ、サラ」が四分音符ふたつで表記され、さらにスタッカートが付されたことによって、厳寒の地に舞うパウダースノーの軽やかさが感じられる。まさに耳で聞くだけで良くわかる日本語の歌である。

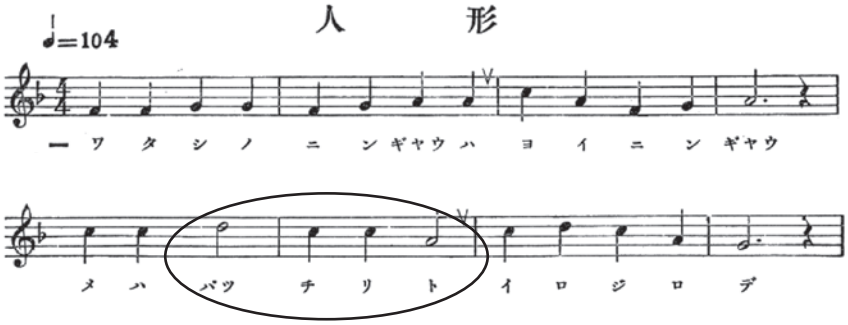
日本語のはなしことばのリズムは等時拍が基本であるが、同時期の読本科の朗読法の研究は、特殊拍としての拗音、撥音、促音、長音に対する指導に言及している（福岡女子高等師範学校附属小学校国語部ｂ1925：６）。唱歌科教材をことばと旋律が一体化した歌曲として考えると、唱歌科では日本語のリズムをどう表記するか、どう歌うかが課題であった。

拗音、撥音、促音、長音などの特殊拍の表記の工夫は、内地の『尋常小学唱歌集』と『新訂尋常小学唱歌集』のなかにもみられ、大正から昭和初期の唱歌教育界ではことばの分節化への関心が高かったことが読みとれる。こうした日本語のヴォカリゼーションに対する意識の変化を、文部省編纂教科書にある《人形》と《案山子》の楽譜の表記からみてみよう。

まず、譜例４の『尋常小学唱歌集』（1911）第一学年用の《人形》では、第５小節から第６小節目「メ　ハ　パッチリ　ト」の撥音のリズム表記が四分音符の等時拍であるのに対して、譜例５『新訂尋常小学唱歌集』（1932）では二分音符を用いてレガートで歌える工夫がなされている。

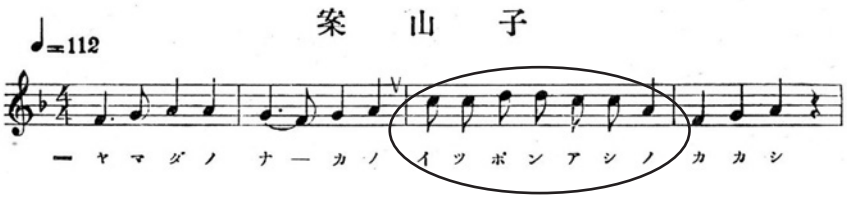


譜例４　文部省編纂教科書にみる促音の表記
『尋常小学唱歌集』第一学年用　1911 年

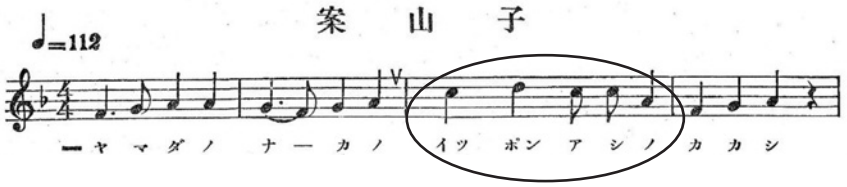


譜例５　文部省編纂教科書にみる促音の表記の変化
『新訂　尋常小学唱歌集』第一学年用　1932 年

また、譜例６の『尋常小学唱歌集』第二学年用（1911）の《案山子》では第３小節目の「イッポン　アシ　ノ」の促音と撥音のリズムが八分音符の等時拍の表記であるのに対して、譜例７『新訂尋常小学唱歌集』第二学年用（1932）では四分音符を用いたことばの自然なリズムに変更されている。



譜例６　文部省編纂教科書にみる促音・撥音の表記
『尋常小学唱歌集』第二学年用　1911年



譜例７　文部省編纂教科書に見る促音と撥音の表記の変化
『新訂　尋常小学唱歌集』第二学年用　1932年

当時の音楽界や唱歌教育界では泰西名曲の替え歌ではなく、だれもが聴解可能な日本語の歌への創作意欲が共有されていたが、『尋常小学唱歌集』（1911）と『新訂尋常小学唱歌集』（1932）刊行の間に編集された第一期『満洲唱歌集』（1924-1927）には、はなしことばのビートを生かして分節化された旋律が多い。内地の音楽界にあった新しい日本語の歌づくりへの気運は、1923年の関東大震災の被害を受けなかった満洲独自の唱歌科教科書のなかで先行して実現していたのである。そして、こうした満洲唱歌教育の先進性の背景に、すでに内地の唱歌教育の第一線で経験を積んでいた島田英雄や園山民平らの尽力と、それを支持した現職教師の存在が見てとれる。

３）明快な歌詞の構成

歌詞の多くはわかりやすい構成で、同語反復や対句、平行などの修辞法でよく整えられている。反復の技法は、低学年においてはリズムを整え、ことばを音としての楽しむ効果があり、学年が進むにつれて意味を固定する役割に変容している。

たとえば《バクチク》では、各節とも前半部をくりかえすことで現地の風習を興味深げに眺めている様子がよく伝わってくる。中国人が街に潜む悪魔を退散させるために鳴らす爆竹は、大きな音で人を驚かし、日本人の子どもたちの関心をひきつける。国語科教科書の『満洲補充読本』一の巻には、旧正月に爆竹を鳴らす風習を取り上げた文章があり、《バクチク》は共存のための理解を促す合科学習の教材になっているが、竹中憲一は「日本の節分の鬼追いのマメをバクチクに見立てたものであり、「満蒙の景物」と「内地」の風俗を融合させたもの」（竹中 2000a：249）であるとして、日本の風習を基にした現地理解のあり方に言及している。

《バクチク》

一　バクチク　パチパチ　パチパチ、コオニ　ガ　ニゲル。
　　アッチ　ノ　ハウ　ヘ　ニゲル。コッチ　ノ　ハウ　ヘ　ニゲル。
二　バクチク　パチパチ　パチパチ、コオニ　ガ　ニゲル。
　　ビックリシテ　ニゲル。アワテテ　ニゲル。
三　バクチク　パチパチ　パチパチ、コオニ　ガ　ニゲル。
　　ミンナ　ミンナ　ニゲル。ノコラズ　ニゲル。

第一期『満洲唱歌集』第一・二学年用　1928 年四版　（初版は 1924 年）

また、高学年用の教材である《土まんじゅう》はト短調、四分の四拍子の曲（♩= 92）であるが、歌詞の起結の部分が同一の構成になっており、ことばやフレーズを重ねることによって感情に訴える効果をだしている[37]。

《土まんじゅう》

一　野原にぽっちり　さびしさう。だれのお墓か　土まんじゅう。
　　お日の照る日も、曇る日も、風の吹く日も、雨の日も、
　　かばってくれる　人もない。野原にぽっちり　さびしさう。
二　野原にぽっちり　さびしさう。だれのお墓か　土まんじゅう。
　　あたりに花は咲くけれど、あたりに鳥は啼くけれど、
　　たづねてくれる　人もない。野原にぽっちり　さびしさう。

第一期『満洲唱歌集』第五・六学年用　1932 年七版　（初版は 1927 年）

37 《土まんじゅう》は第二期『満洲唱歌集』第六学年用（1936 年改訂版　初版は 1929 年）にも掲載されているが、歌詞と調性（ト短調）は同一ながら旋律は大きく異なっている。日本の国民教育史を唱歌教材でたどった鷹野良宏は、この歌が「土まんじゅう」を原住民の無縁仏の墳墓として「さびしさう」という子どものことばで憐れんでいることに、支配者意識が内在していると指摘している（鷹野 2006：213）。

4）　国文学の伝統の希薄さと新しい韻律の試み

低学年用の教材にオノマトペが多く、子どもの生活が題材になっていることに比べると、高学年用では歴史や理念を題材にした文語（調）の叙事詩が増えて、内容や用語も変化している。

ところが『満洲唱歌集』の歌詞には、『尋常小学唱歌集』にみられる係り結びのような国文学の伝統や、「仁田四郎」を「にたんのしろう」と読み習わす平家物語や浄瑠璃の声の伝統はつながれていない。むしろ、高学年用にみられる文語体の歌詞には漢字の熟語が用いられ、韻も「白光紫光」、「壮観奇観」（《黒龍江の解氷》）のように漢字の音読みに依っている。

《黒龍江の解氷》

二　解けてくだくる　音ものすごく　みだれて下る　厚氷
　　白光紫光　かゞやき映えて　くるひみなぎる江上の
　　壮観奇観　まなこくるめく。

第二期『満洲唱歌集』第六学年用　1936 年改訂版　（初版は 1929 年）

このように、満洲唱歌の作詞者が抱いていた、声として発せられる日本語の音韻やリズムに対する関心は非常に高い。そして、歌詞の音数律も伝統的な七五調や五七調にとどまらず、一曲のすべてが四＋三の七音に整えられた作品も見られる。

《閑院の瀧》

一　人里遠く　わけ入(い)る山路(やまぢ)、　百千(ももち)の鳥は　梢にうたひ、
　　ほとゝぎすさえ　しば鳴く真昼、　いづこかひゞく　水音涼し。
二　みどりの木蔭(こかげ)　照る日ももれず、　巌(いはほ)のはだへ　苔むすところ、
　　落つるや水のしらべも高く、　沫(しぶき)はちりて　夏さへ寒し。
三　銀河(ぎんが)のながれ　あふれてこゝに、　とびちる珠(たま)の　真清水(ましみず)きよら、
　　畏き宮の　御足(みあし)をしばし、　とめまゐらせし　閑院(かんゐん)の瀧(たき)。

第二期『満洲唱歌集』第六学年用　1936 年改訂版　（初版は 1929 年）

《閑院の瀧》の詩は七音の音数律による作品であり、作詞を担当した国語科編輯委員が有能な教師であると同時に、意欲的な表現者であったことを証している。『満洲唱歌集』には、新しい日本語の歌を作ろうとする意志が作詩の領域においても明確に表れており、題材の選択だけではなく、声としてのことばの韻律に対する関心も高い。先に、序章で紹介した歌詞担当編輯委員のふたつの詩も、口語の定型詩であったことを思い起こしてみよう。「私たちの生活を歌ふ」は七・七・七・五の音の連続で構成され、「教科書編輯部の歌」は七五調に整え

られている。口誦すると語音の流れのリズム感が心地よく、ことばの意味の内容だけではない、感覚的な魅力がある。明治の唱歌では歌詞のことばの品格に配慮がなされていたが、満洲唱歌の歌詞には語音の響きのつながりに快感がある。そして、歌詞の中には生活の場で聞こえる満洲の声も取り込まれて、中国の地名以外の中国語やロシア語の単語も散見される[38]。

5） 規範としての西洋音楽

『満洲唱歌集』の歌詞には日本語化された中国の音や声がとりこまれている（後述：第２節第２項の３）が、現地の文化は「幼稚」[39]とされていたので中国人に愛唱されていた歌は含まれず、すべてが西洋音楽の語法で書かれた日本人による新曲である。

第一期『満洲唱歌集』は 60 曲、第二期『満洲唱歌集』は第一期『満洲唱歌集』を基に拡充した 104 曲で構成されている。そのうち、第二期『満洲唱歌集』には第一期『満洲唱歌集』の歌詞に別の旋律がつけられたものが４曲あり、旋律の分析対象は 131 曲であった。ほとんどの旋律が長調で、低学年に五音階や主音以外の音で終止して余韻を残す作品が多い。ヨナ抜きは 26 曲、一音をのぞくとヨナ抜きというのがさらに 10 曲あり、ピョンコ節は２曲であった。旋律の動きには中国民謡や流行歌を思わせるものが含まれている。

表１　第一期・第二期『満洲唱歌集』の旋律の特徴

旋律の特徴	曲数	
長音階	113 曲	
短音階	17 曲	
民謡音階	1 曲	
ヨナ抜き	26 曲	（ほぼヨナ抜きはさらに 10 曲）
終止音が主音以外	14 曲	（中音終止　６曲、属音終止　８曲）
終止が属音→主音か導音→主音	16 曲	
ピョンコ節	２ 曲	

『満洲唱歌集』の旋律の特徴を終止に着目してみていくと、学年を追うごとに属音から主音、導音から主音の進行が増えることやドッペルドミナントの使用がみられるなど、ドミナントモーションによる上位のリズム構造がより明確になる。また、高学年になると転調による変化、弱起、6/8 拍子の曲が配置されるなど表現法が拡大し、声域は約一オクターブ半（$b_2{}^{b}$—$e_4{}^{b}$で文部省編纂教科書と同じ）を想定して書かれている。

38　日本語話者が聞き取った中国の声とことばについては、第２節、満洲の生活から紡ぎだされたことば　２項の３）で詳述する。
39　法貴慶次郎（満鉄学務課長）「満洲教科書編輯部の十年記念を祝して」（南満洲教育会教科書編輯部（1932）『樗の木かげ』p.14）

関東洲の小学校では唱歌科専任教員の配置促進によって、教授内容が作曲や楽器の指導にも及んでいる（編著者不明1932：143-144）が、この調査では唱歌科の到達目標をさらに明確化するために、内地以上に進学率が高かった中等学校（中学校・高等女学校）の教科書も参照した。その結果、中等学校用の教科書にはドイツ民謡やベートーベンの第九交響曲の《歓喜の歌》で知られる旋律を用いた歌が含まれており、聞き取りと質問紙調査の結果からも「授業でドイツ民謡を合唱した」、「同窓会でドイツリートを原語で合唱して楽しんでいる」（安増照子さん2010）、あるいは「当時の映画（「会議は踊る」）の主題歌（ドイツ語…筆者注）を今も聞いたり、歌ったりしている」（渡辺幸博さん2010）等の回答があった。

また、同窓会誌に掲載された高等女学校の音楽会のプログラム[40]を調査したところ、合唱（二部・三部）やピアノ独奏・連弾、独唱の曲目[41]のうち、歌曲はいずれも泰西名曲に日本語の歌詞を付けたものか、日本人が西洋音楽の技法で創作した作品であった。そして、生徒の創作活動については、弥生高等女学校の音楽演奏会プログラムに校内募集による生徒の作詞と作曲による作品9曲が掲載されており（楽譜は掲載されていない。また、8曲は数人による共同作品である）、生徒の独唱と伴奏によって発表されている。

これらのことから、満洲の唱歌教育で目指されていた音楽性は当時のドミナント・パティキュラーであった西洋音楽を規範としたものであり、現地の音楽との同化を想定したものではなかったと考えられる。

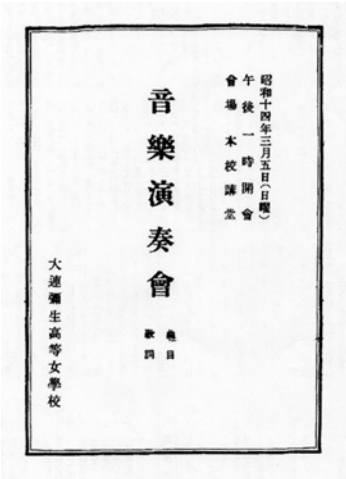

昭和十四年三月五日（日曜）
午後一時開會
會場本校講堂
音樂演奏會
曲目
歌詞
大連彌生高等女學校

図2　弥生高等女学校音楽演奏会プログラム表紙（1939）
（安増照子さん提供。原資料は弥生高等女学校同窓会誌）

第2節　満洲の生活から紡ぎだされたことば

この節では歌詞の中にみられることばを手掛かりにして、現地に生きる日本人の生活の理念や感情をみていこう。満洲の教科書編輯委員は全員が満洲の生活者であったことに加え、満洲唱歌は国語科と唱歌科編輯委員の共同作であったから、歌詞の中には、表現者としての内省や編輯委員に代表される中産知識階級の社会意識が抽象化されて、内在すると考えられる。『満洲唱歌集』全曲の歌詞の分析結果から、在満日本人の関心や価値観に関わるキーワー

40　大連弥生高等女学校「音楽演奏会　曲目歌詞」（昭和14年3月4日（日曜）、午後一時開会、会場本校講堂）、および撫順高等女学校「創立二十周年記念音楽会プログラム」（昭和17年2月17日午後一時）。

41　合唱の曲目はドイツ民謡《故郷を離るる歌》、ロシア民謡《ボルガの舟歌》、日本古謡《さくら》（下総皖一曲）、当時の新作（園山民平《皇軍万歳》、信時潔《海ゆかば》）、満洲唱歌《夜汽車》、《護れ国境》（『満洲新中等唱歌巻二』）、ピアノ独奏の曲目はヘンデル、ベートーベンの「変奏曲」、ベートーベン「ソナタ」（ト長調・悲愴）、ショパン「ワルツ」、ウェーバー「舞踏への勧誘」、連弾はシューベルト「軍隊行進曲」、独唱は《故郷の廃家》、《モーツアルトの子守歌》、《出船》、《旅情》である。

ドに注目して、出現する文脈や背景にある力学や人と人のつながり方をみていく。

第１項　肌で接した満洲の風土

国定教科書の補充として編集された満洲独自の教科書には、内地とは異なる「郷土」としての満洲が謳われている。

内地の『尋常小学唱歌集』の題材には「尋常小学読本所載……修身、国語、歴史、地理、理科、実業等諸種ノ方面ニ渉リ……文体用語等ハ成ルベク読本ト歩調ヲ一ニセン」（文部省（1911）『尋常小学唱歌集』第一学年用緒言）とあり、学校の教科内容につながる皇民教育、忠臣、偉人伝、日本昔話、自然、生活がとりあげられている。

一方、『満洲唱歌集』の緒言に、題材は「主として満蒙の景物を背景とし、児童の日常目撃するもの丶中から趣味の教養、感情の陶冶に適切なものを選んだ」（南満洲教育会教科書編輯部（1928）『満洲唱歌集』尋常小学第一・二学年用緒言）とあり、『満洲補充読本』の韻文や文章の内容と一致するものが多くみられる。[42]『満洲唱歌集』の第一期・第二期全曲の歌詞から頻出語を抽出してみていくと、在満日本人が全身でとらえた「満洲」が見てとれる。

表２　　頻出語とその内容（第一期・第二期『満洲唱歌集』）

「花」 アカシヤ、梨、翁草、木ささげ、百合、楡、杏、桃、からたち、バラ、蓮、ぺんぺん草

「空」 青、るり色

「広野＋野」・「風＋飛ぶ＋吹く」

「木」 柳、木ささげ、桃、楡、松

「音」 蛇皮線、胡弓、虫、ピアノ、波、槌、馬の蹄の音、厚氷の解ける音

　「鳴る」 ロバの鈴、汽車の鐘、暖房のスチームの音、一輪車の車輪のきしむ音

「声」 小鳥、雁、小犬、子ども、ニワトリ、コオロギ、キリギリス、叫喚

　「鳴く」 ヒバリ、ヨシキリ、朝鮮カラス、鳩、羊、ホトトギス、カッコウ

表２の頻出語からみた満洲は、空は青く、可憐な花の咲くところ――そして「野」、「風・飛ぶ・吹く」は「広野」と関連して空間的な拡がりを表し、内地とは異なる「満蒙の景物」を多く詠っている。こうした満洲観は『満洲補充読本』一の巻（1935）のなかにも明確に表れており、「ソラ」に注目することで空間的な広がりと未来や希望を謳っている。

42 『満洲補充読本』の韻文と『満洲唱歌集』の歌詞が一致する歌は 13 曲、内容が重なる歌は 19 曲で、いずれも高学年よりは一学年から三学年に多く配置されている。

一　　マンシウ

ソラ　ノ　ウツクシイ　マンシウ。

ヒロビロ　ト　シタ　マンシウ。

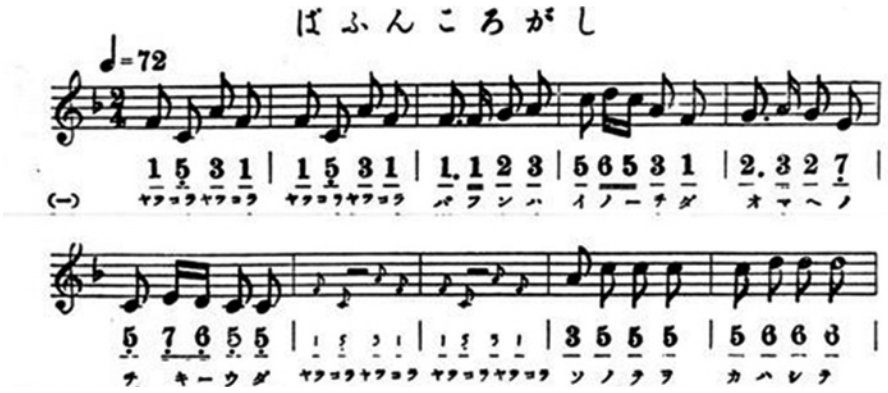
ワタクシドモ　ハ　マンシウ　ノ　コドモ　デス。

『満洲補充読本』一の巻 1935 年

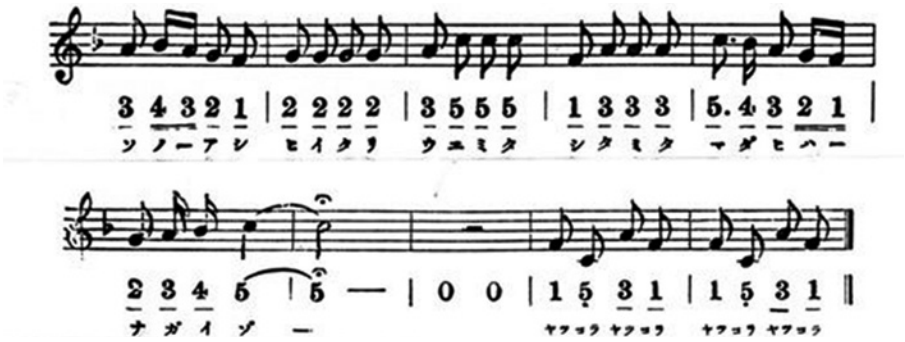
さらに、聴覚でとらえた満洲に注目すると、聞こえてくるのは楽器の音、家畜の声とその動きに関連する音、自然の音、生活の音、鳥や虫の声などさまざま[43]で、満洲の大地に身を置いた人間の素朴な思いがことばになって表れている。満洲の生活で見聞する風俗、景物は国語の読み物として学習され、唱歌の時間に歌われた。満洲唱歌は満洲の景物を題材にして満洲の先生が詩を作り、満洲の先生が歌にしたもので、日本人子女は生活がことばになり、ことばが歌になって広がっていくことを経験していたことになる。

また、教科書の内容については編輯委員や学校関係者だけではなく、父兄をはじめとする一般の人びとも関心を寄せていたことが新聞や雑誌の記事からうかがえる。

第一期『満洲唱歌集』にある《バフンコロガシ》（譜例８：第二期『満洲唱歌集』の題名表記は「フンコロガシ」）がその一例である。『満洲補充読本』のなかには唱歌の歌詞内容と関連した、満洲に生息する糞虫類「バフンコロガシ」の特異な生態観察の記事が記述されているが、いかにも子どもたちが興味を抱きそうなこの教材に関連して、満洲日報（1928 年５月２日付）に『ファーブル昆虫記』の「フンコロガシ」との違いを質した父兄の投書への回答（井上編 1936：付録 94-95）が掲載されている。二匹のバフンコロガシが協力して馬糞のかけらを運んでいく様子を描いたこの唱歌は、子どもたちのみならず満洲で暮らす日本人の興味や関心に合致していたのである。



43 「声」の用例のなかに、一例ながらも「叫喚」が含まれるのは満洲が激戦の地を擁する場であるという認識を示している。



譜例８　在満日本人のとらえた「満洲の景物」を作品化した例
第一期『満洲唱歌集』第三・四学年用　1928 年三版　（初版は 1924 年）

さらに、満洲唱歌《バフンコロガシ》の歌詞は雑誌『満蒙』のコラムにも掲載（日中文化協会 1928：９（９）（101）画像 63/112）されており、教科書に選ばれた題材や満洲唱歌は当時の日本人社会において早くから共有されている。そして、南満洲教育会関係者は『満洲唱歌集』を高く評価し、歌に満洲の教育にかける理想を投影している。

> 見るからに垢ぬけした明るい気分を起させる。第一頁からいかにも満洲らしい地方色が犇々とせまる……満洲がお伽の國、童話の世界として如何にも和らかな、そしてある魅力を持った理想郷であるやうに感ぜられてならぬ。
>
> （南満洲教育会 1928：編集後記「編輯部室窓外」）

こうしたほとんど即時的ともみられる共感は、満洲唱歌の題材が満洲の景物のなかから日本人の感性で切り取られ、日本人社会の価値観で再構成された作品であることに由来する。編輯委員間で共有されていた社会意識は、在満日本人として生きる現実を主体的に表現する過程で抽象化されて取り込まれ、歌詞に表れた生活感情や関心の所在、感慨に多くの人が共感したのである。子女の教育に熱心であった満洲の日本人社会は、満洲唱歌を自分たちの歌として、沁み込むように受け入れている。

第２項　日本人として生きること――在満日本人社会の生成

ここでは、内地とは大きく異なる風土に暮らす日本人の自己了解のあり方を、満洲唱歌の歌詞から見てみよう。満洲は租借地として日本の権力の及ぶところになったが、遼東半島の先端に位置する関東洲でも周囲はすべて中国領土であることを考慮して、生活感情や価値観が表れやすい、人（日本人）のつながり方に焦点を当てて分析をした。

1）　内地の生活感情の尊重

第二期『満洲唱歌集』（1932–1936）低学年用の教科書に加わった新しい歌には日本人の家庭生活の様子を描写しているものが多くみられ、その内容は中産階級に属する給与所得者の生活風景である。

表３にまとめた日本人の生活を題材にした歌の特徴をみていくと、第一に生活に余裕があることが挙げられる。歌詞のなかで描かれているのは、家事に使用人の助けを得ることができ、庭でトマトや向日葵を育てて季節を楽しみ、内地出張では子どもたちそれぞれが希望した品を土産にすることができる豊かな生活である。

表３　　日本人の生活を題材にした曲と内容

団欒の時間に歌やお話を楽しむ経済的・時間的な余裕がある…《ウレシイ　ヨル》、《ラジオ》

内地の中産階級の家庭と交流がある……《オミヤゲ》

庭のある家に住んでいる……《トマト》、《ヒマワリ》、《引越》

家事使用人がいる……《アメンボウ》、《一りんしゃ》

転勤がある……《引越》

日本の伝統や風習を尊重している……《シンチク》、《五月のぼり》

質問紙と聞き取り調査の結果においても、在満日本人社会には家事使用人のいた家庭が多く、本人や家族が多様な楽器のおけいこをしているなど、生活に余裕がある。家庭ではすごろくやカルタなどの遊びに興じ、親や兄弟姉妹と一緒に歌を歌うことなどで家族団欒の時間を楽しんでおり、唱歌は兄弟姉妹、いとこ、友達との語らいや遊びのなかでも伝えられ、学習されている。

《シンチク》では、丘の上の家屋の棟上げ式で神主が餅をまき、子どもたちが喜んで拾ったことが謳われており、家の新築という人生の大事業が神道に則って描かれている。質問紙調査の中でも節句の祝いや季節の行事など、日本の伝統や風習が尊重されていた[44]ことが確認でき、気候や風土が異なっていても内地の文化や生活感情が大切にされている。「関東洲」という呼称が山海関の東の大八洲（日本）を意味するように、外地にあっても日本領土として意識されていた土地に住む日本人の振舞いは、内地と同じことが自然なこととされていたことが推測され、「日本」領土であることや「日本人」であることが強く意識されている。そして、こうした生活感情の共有によってつながれた共同の感覚は、伝統的秩序の分限によっ

44　日本の伝統や風習が尊重されていたことは、手記のなかにも確認できる。「…我が家でも、父も母も季節の折り目折り目の年中行事を律義にやっていた。たとえば、寒冷地の一月七日に七草なんぞどこを捜したってあるわけはないが、それでも「ナナクサ、ナズナ、トウドノトリガ、ニホンノクニヘ、ワタラヌサキニ、トントコトン、トントコトン」と唱えながら俎板の上で菜を刻むことを子どもたちも覚えるような生活だった。……庭には、……普通の花が咲いていたが、その他に桔梗、おみなえし、吾亦紅、かるかや、すすきなどが秋の月見のためのものとして植えてあった。」（藤森 2013:59）

て左右される「世間」ではなく、原籍地の異なる個人の集合である「在満日本人」という新しい社会の生成につながっている。

2） 皇民教育と新教育

満洲の学校でよく歌われたのは満洲唱歌だけではなく、それぞれの学校の校歌がある。関東洲と満鉄付属地では生徒の出身地が異なることから意思統一をおこなう必要があり、「学校行事には必ず校歌が歌われ、事あるごとに校旗を先頭に行進が行われた（竹中 2000a：109）」。ここでは儀式のたびに全員で歌われた校歌の歌詞に、国家主義的な文言が多くみられることに注目してみよう。

旅順と大連の小学校・中学校・高等女学校を中心とした 38 校の校歌をみていくと、歌詞の多くに皇民教育を意識したことば――「大君」「皇統連綿」「すめらみこと」「天津日嗣」「八紘」など――と、東亜の新秩序建設への使命、あるいは両者が謳われている（編著者不明 1932：156-157）・（姫路あかしあ会 1986： 1 -22）。これは関東洲が日本の飛び地として理解されていたことに加え、生活圏が中国領土内にあるという場の緊張によって国家意識が先鋭化されて表れたものと考えられる。

皇民教育の核となった教育勅語（1890）は国民道徳と日本の教育の基本理念を明確にしたもので、各教科の学習内容は勅語の趣旨に基づいておこなわれ、学校儀式では学校長が拝読するなど学校教育を強く規定していた。天皇の統治を中核とする国のあり方である国体は天皇と臣民の関係が社会契約説に依るのではなく、大御宝（おおみたから）として天皇が愛護するものとされ、君主と人民の闘争に明け暮れる西洋よりも日本の民族的な優位性を示す制度として絶対視された。教育勅語の国体観、臣民観が子どもたちだけでなく、広く一般に受け入れられていたことは、旅順港閉塞作戦に従事する肉親への愛情を「すめらみことは　たたかひに　おほみずからは　いでまさね」と世相に抗して謳った与謝野晶子が「万世一系の皇室を中心に大家族的な結合力を持つ国民の存在する事実は絶対無比で…教育勅語は…未来永劫に亘って世界人類の師表となるべき」（与謝野 1932：264）と記していることからも見てとれる。

戦前の日本における人間形成は、天皇を道徳的規範として内面化することであり、個人の自由意思の形成は天皇との道徳的関係にあった。新教育がこうした皇民教育を基盤に展開されるとき、自らの感性を信じ、自学自習の能力を養い、主体的に行動できる子どもを育てる思潮は、主体的に行動できる皇民の育成にスライドし、体制への服従を自発なものとして擬制できるようになる。

第二期『満洲唱歌集』には低学年での児童中心主義の歌と高学年での帝国主義的な歌が並列されており、戦意高揚や死に至るまでの国家への忠誠の称揚は、旧来の主知的詰め込み教育の閉塞的状況を開くべく、子どもの感性を尊重し、主体性の養成を目標とした新教育の思潮が、満洲という外地で先鋭化した皇民意識のなかに合流していったことを表している。

3）　日本語話者が聞き取った中国の音とことば

満洲唱歌の歌詞には、日本語話者（在満日本人）が聞き取った中国の楽隊の音――たとえば《たかあしをどり》の「ピーヂャン、ピーヂャン、ヂャンヂャラヂャン」――や胡弓の音が取り込まれている。手記の中では、町に流れていた笛やドラ、胡弓の音は満洲育ちの方々の原風景の中にあり、今も即時的な反応につながるという。

> ドラの音は、今でも一つ響いただけで、心がわんわんわんと共鳴して騒ぐし、胡弓の音を聞くと、なにかやるせない気持ちを誘われる。（藤森 2013：64）

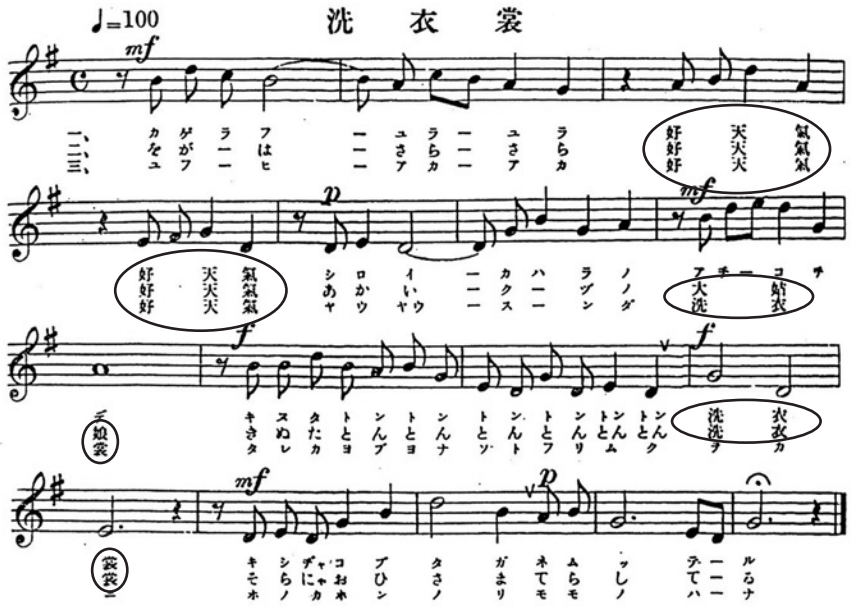
また、歌詞の中には日本語化した中国語の「苦力（クーリー）」「戎克（ジャンク）」（《木蔭の夢》）、「洗衣装（シーイーシャン）」、「好天気（ハオテンチー）」、「大姑娘（ダークーニャン）」（《洗衣装》）、「老頭児（ロートル）」、「梨糕（リゴウ）」、「糖葫蘆児（タンホーロ）」、「小孩（ショーハイ）」（《山楂子売り[45]》『満洲新中等唱歌[46]』巻二）、日本語化したロシア語の「ペチカ」（《ペチカ》）、「パスカ（復活祭）」、「サモワル」（《ハルピン》『満洲新中等唱歌』巻一）、中国語化した日本語の「クリヌクイ」（《栗売》）（「栗ぬくい」とは天津栗の売り声で、後述する譜例 10《栗売》の終止部にみられる。）など、日本語話者が現地で聞き取ったことばが散見される。これは日本人が租借地で耳にする外国語を歌詞に取り入れることで、満洲の生活をリアルに描こうとする試みである。

たとえば、当時の中国人の生活風景を謳った《洗衣装》（譜例９）では歌詞に中国語を取り入れて、川での洗濯が娘さんの仕事であった現地の習慣（藤田昭さん 2010）を表現している。日本人の子どもたちも町中で中国語を聞くことは常であっただろうし、満洲の小学校では中国語学習の時間が配されている[47]から、ここにみられる日常会話や名詞程度の中国語の理解は想定されていたのであろう。

45　『満洲中等唱歌』巻二（1979：1938 年再版の復刻版、初版は 1937 年）に掲載されている。《山査子売り》の中国語について、関東洲の普蘭店で育ち、引き揚げ後に中国文学を学んだ藤森節子は「いかにも日本語化した言葉」と評している。「歌の中のロートル（老頭児（ラオトル））やタンホーロ（糖葫蘆児（タンフウル））は、いかにも日本語化したことばを堂々と通用させており、逆にリーゴは日本語のりんごが中国人に使われるもので、植民地の言語の特徴はいろいろな場面であらわれていた。」（藤森 2003：71）

46　『満洲新中等唱歌』巻一・巻二（1979：1938 再版の復刻版）には日本人が聞き取った中国語の単語だけではなく、中国語の歌が３曲ずつ掲載されている。『満洲新中等唱歌』巻一・巻二は南満洲教育会教科書編輯部の刊行物ではないが、編集は昭和２（1927）年の満洲中等学校音楽科教員協議会の決議に基づいており、中国語の歌の掲載は現職の教師集団が共有していた理念によるものと考えられる。一般に、中等学校用教科書の内容は小学校課程の教育目標をさらに進めて吟味されることから、教材に中国語の歌が含まれていることは編集方針の「民族協調」を反映したものとして注目される。

47　満鉄では小学校経営の初期から中国語を配当し、一部の学校で教えられていたが、1925 年には付属地の尋常小学校五・六年の随意科目となり、高等小学校では正課に準ずる科目とされた（南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会 1939：384-385）。関東洲の小学校では中国語は 1927 年に正科とされ、翌年から中国語の時間が設置された（編著者不明 1932：154）。1930 年の関東庁告示第 52 号では「関東洲小学校教科用図書」として、尋常小学校第４学年から第６学年用に「支那語」の教授用掛図と「初等支那語教科書」が掲載されている。（『在満日本人用教科書集成』第 10 巻：120）



譜例９　日本語化した中国語を取り入れた例
第二期『満洲唱歌集』第四学年用　1934 年初版

《洗衣装》にみるように、日本語話者が聞き取った満洲の生活の中の音やことばと結びついたふしまわしやリズムは、音楽の伝達力の中核となって満洲唱歌を内地の尋常小学唱歌とは異なる独自なものとして印象づけている。満洲唱歌が他の歌とは異なる歌として意識されるのは、こうした日本語話者が聞き取った満洲の音やことばを生かした歌の作られ方によるところが大きい。

第３項　内容分析による内地の教科書との比較

すでに述べたように、国語科と唱歌科編輯委員の共同作である満洲唱歌には、当時の満洲の知識人の間で共有されていたモラルが抽象化されて存在すると考えられる。一般に、モラルの表出は人と人のつながり方に顕著にみられることから、歌詞に謳われた人物と国・民族に着目した内容分析を重ねることで、満洲に生きる日本人の生き方についての考えや、精神的な態度の抽出を試みた。

１）　描かれた人物の性別による分析

はじめに『満洲唱歌集』のなかで人物を主題にした曲に着目し、表象する内容を男女別に分けて、内地の『尋常小学唱歌集』『新訂尋常小学唱歌集』の内容と比較した。

『尋常小学唱歌集』・『新訂尋常小学唱歌集』の歌詞では女性は母か、働く少女としてうたわ

れ、子への慈愛や従順、扶翼を表象し、男性は多くの場合、武士、軍人、偉人として登場する。そして、人間としての徳目である正直、勤勉、信義、忠誠は男性の話として語られている。

一方、『満洲唱歌集』では女性の歌の内容は母としての家事育児が多く、女性は銃後を守る存在（《銃後の女性》）として表されており、一曲ながら、巡査の妻の戦死事件にもとづく《殉国の女性》の歌の存在が目を引く。それに対して、日本人男性を謳った歌には家庭人としての父親を描いたものが一学年用にみられるものの、多くには軍隊や仕事を題材にして、国民皆兵という近代の制度による国家に対する忠誠や鎮魂がうたわれている。さらに、忠誠を謳った９曲のすべてが戦死につながり、死に至るまでの忠誠が顕彰されている。（表４）

表４　描かれた人物の性別による内容分析

尋常小学校（編集期間：大正 11（1922）年–昭和５（1930）年）					
学年	出版年	曲名	男女別	文意	表象する内容
三・四学年用	1928 年三版 ◎ 1926 年	ーりんしゃ	男性○	ぢいやの一輪車の操作	日本人主体の生活
		栗売	男性○	厳寒の夜の行商	憐憫
		銀頭公	男性○	影武者兵士の戦死　†	忠誠・義認
五・六学年用	1932 年七版 ◎ 1927 年	海こえて	男性	満蒙開発	報国
		轎車	女性○	母子の語らい	母性
		木蔭の夢	男性○	苦力の午睡の夢	同情
		爾霊山の秋	男性	日露戦争の激戦　†	戦死者の追悼
		二勇士	男性	処刑された民間人の間諜　†	忠誠・尊厳
		伊藤公	男性	伊藤博文暗殺事件　†	顕彰
		望小山	女性○	向学の子の帰りを待つ母	母性
尋常小学校・各学年配当（出版の時期：昭和４（1929）年–昭和 13（1938）年）					
学年	出版年	曲名	男女別	文意	表象する内容
第一学年	1932 年	オミヤゲ	男性	内地帰りの土産	父と子の情愛
		ロシヤパン	男性△	ピロシキの行商	ロシアの斜陽
第三学年	1933 年	水兵さん	男性	水兵の上陸（休日）	歓迎
		月が出て来る	女性	子を守る覚悟（子守歌）	母性
		守備兵さん	男性	鉄道の夜間警備	忠誠の称揚
第四学年	1934 年	りんご	女性	母子の会話	育児・家事
		洗衣裳	女性○	川での洗濯	家事
第五学年	1935 年	土にぬかづけ	男性	戦死者への鎮魂　†	祖先崇拝
		＊轎車	女性○	母子の語らい	母性
		軍旗へ	男性	古賀中佐の戦死　†	軍人の称賛
		ああ百七十六騎	男性	戦死者への鎮魂　†	鎮魂
第六学年	1936 年改訂再版 ◎ 1929 年	われらの陸軍	男性	軍人の称揚	正義・護国
		殉国の女性	女性	陶家屯事件　†	扶翼・顕彰・忠誠
		北大営の戦	男性	柳条湖事件の川島中隊　†	軍の称揚
		白襷隊	男性	旅順戦の中村鬼少尉　†	忠誠・顕彰
		＊望小山	女性○	向学の子の帰りを待つ母	母性
		南嶺戦	男性	南嶺戦の倉本少佐　†	忠誠・顕彰
		嗚呼二烈士	男性	間諜の死(奉天戦)と友愛　†	忠誠・顕彰

高等小学校					
学年	出版年	曲名	男女別	文意	表象する内容
第一学年	1938年三版 ◎1937年	日章旗にしぶく血潮	男性	満鉄社員の殉職 †	忠誠・顕彰
		銃後の女性	女性	銃後の守り	扶翼
		義人村上	男性	勇敢な日本人 †	顕彰・衿持
満洲新中等唱歌 満洲中等学校音楽科教員研究会編纂 大連音楽学校発行					
学年	出版年	曲名	男女別	文意	表象する内容
第一学年	1938年再版 ◎1937年	第一線	男性	戦意の鼓舞	勢力拡大
		演習の歌	男性	教練の称揭	忠誠・実行
第二学年	1938年再版 ◎1937年	護れ国境	男性	防衛戦の覚悟	不退転の忠誠
		孝婦河	女性○	孝婦河の由来	嫁の孝行
		凱旋兵を送る	男性	凱旋	称揚
		蒙古の旅	男性	砂丘の旅	忍耐・忠誠

凡例：◎は初版年、○は中国人、△はロシア人、†は満洲での戦死に関連する内容、＊は同一曲。

こうした『満洲唱歌集』にみられる性別役割分担意識は、満洲国防婦人会宣言や軍人勅諭（1821）にみられる当時の言説と一致している。歌詞のなかに当時の日本人の社会意識が織り込まれていることを、ふたつの資料からみていこう。

満洲国防婦人会宣言

一、大いに婦徳の涵養に努め、悪風と不良思想に染まず、国防の堅き礎となり、強き銃後の力となりましょう。

一、心身共に健全に子女を養育して御国の御用に立てましょう。……

（東京撫順会 2012:121、初出は東京撫順会「永安橋―撫順子達のあの頃の思い出」1985年2月1日号）

婦徳[48]とは古くから女性として守るべき徳義とされ、一般には女性の気立ての良さを示すことばであるが、ここでは性別役割分担を前提に銃後を護る精神の涵養が強調されている。そして、母性は子女を「御国の御用に立て」るために称揚され、女性が自ら銃後の守りを以て任じていた世相を反映している。

軍人勅諭（1822年）

一　軍人は忠節を盡すを本分とすへし……只々一途に己が本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ……

48　婦徳は、中国の『周禮』の「天官篇」にある婦学の法「婦徳、婦言、婦容、婦功」が典拠とされ、江戸時代の女子往来物（和俗童子訓・女小学）のなかにもみられるが、1920年の高等女学校中改正令では第一条に付加された「特ニ国民道徳ノ養成ニ力メ婦徳ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」の文言の中に用いられている。

軍人勅諭は天皇と軍人の直属関係を明快に述べ、上官への絶対的な服従を要求している。勅諭の内容にある忠節や礼儀、武勇、信義、質素は軍人の守るべき徳目とされていた。

第二期『満洲唱歌』の高学年用教科書に見られる戦闘や戦死への顕彰は、忠節と武勇、信義を謳っている。尋常小学第六学年用の《白襷隊》の歌詞の冒頭「君に捧し身は軽し、死して護国の鬼たらん」は、軍人勅諭の文言に加えて、人気の高かった軍歌《元寇》の「死して護国の鬼と誓ひし箱崎の神ぞ知召す大和魂潔し」の歌詞の一部を織り込むことで勇壮と戦勝の印象を取り込み、皇国思想や愛国意識を高揚させている。こうした作詞の技法は感覚的な効果を増加させる作用があり、ヘゲモニーの巧妙な手法になっている。

2）　題材になった国・民族別による分析

『満洲唱歌集』には五つの民族（日本・朝鮮・露西亜・満洲・蒙古）につながる内容の歌がある。『満洲唱歌集』を中心に、中等学校用も含めた唱歌科教科書の歌詞を国・民族の別に分類したところ、当時の社会構造の転写や日本による開拓・維持を肯定する内容が多くみられた。

表５にまとめた分析結果では、日本が輝かしさや力強さ、先進性につながる太陽、飛行機、鉄道などの題材にむすびつけられているのに対して、中国は家事手伝いや物売り・苦力など、貧しく従属的な立場の人の姿で描かれている。

しかし、中国に対するまなざしは両義的であり、《千山》では南画にみるような険しい山の中で暮らす道士の姿に中国の文明や精神性をみて、歴史性に置いては高く評価している。満洲に関する歌は満洲国建国の理念をそのまま謳ったもので、蒙古は荒涼とした砂漠や過去の英雄ジンギスカンを題材に、短調の旋律で表現されることが多い。また、朝鮮ということばは、満洲や朝鮮で見られるカササギを日本のカラスと似ているが異なる「てうせん烏」とした固有名詞のなかにみられる。そして、ロシアについてはハルビンのロシア文化を憧憬しながらも、ロシア人パン売りの行商に落日の立場を投影している。

表５　題材になった国・民族別による内容分析（五族別）

曲名	国・民族	文意	表象する内容
アメンボウ	中国	アメンボウへの語りかけ（バアヤの不在）	社会構造の転写
一りんしゃ	中国	畑中でのぢいやの一輪車の操作	社会構造の転写
栗売	中国	栗売の行商（冬の夜）	憐憫・社会構造の転写
木陰の夢	中国	苦力の午睡の夢	憐憫
千山	中国	峻嶺の仙壌探勝と道士の清廉	畏敬
白塔	中国	直射日光からの擁護（二番）	社会構造の転写
銀頭公	中国	影武者兵士の戦死	忠誠・義認
轎車	中国	一家の家路の様子	生活風景
洗衣装	中国	川での洗濯	生活風景

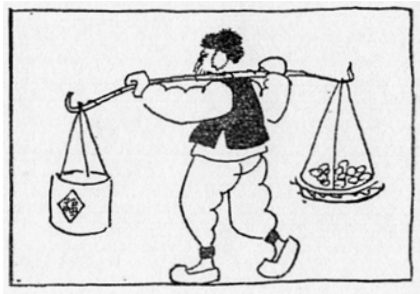
桃花源	中国	夢想と現実	平和の希求
馬車	中国	御者のムチ使いの様子	社会構造の転写
万里の長城	中国	万里の長城の壮大さ	歴史的な感慨
山ざしうり	中国	山ざしうりの老人と子どもの行商	社会構造の転写
たゝへよ満洲国	満洲	満洲国の方針への称賛	自由・民主・平和・国際協調
興る満洲	満洲	満洲国の称賛	王道楽土
土に聴く	満洲	国土・資源開発の称揚	五族協和
鉄路は光る	満洲	満鉄の称賛	開拓・維持の肯定
満洲里の朝	満洲・ソ連	満洲とソ連の国境	国境近くの緊張
満洲建国の歌	満洲	建国の賛歌	建国の肯定（完了・持続）
満洲民謡	満洲	苦力の労働　1・2・3番	社会構造の転写
蒙古の砂漠	蒙古	荒涼とした砂漠の景色	忍耐
成吉思汗	蒙古	成吉思汗の覇業と死	歴史にみる覇業と限界
蒙古の旅	蒙古	砂漠の旅	忍耐と覚悟
てうせん烏	朝鮮	夕暮れ時のカササギの群棲の様子	内地（の烏）との区別
ロシヤパン	ロシア	ピロシキの行商	社会構造の転写
ハルビン	ロシア	ハルビンの四季の情景	生活の中のロシア文化
日の出の歌	日本	日の出の壮麗さを日本と同視	日本の権勢
空の握手	日本	日本の旅客機の雄姿	日本の国際貢献
南満本線	日本	南満本線の貢献	開拓・維持の肯定
あじあの歌	日本	アジア号の称賛	開拓・維持の肯定
空の旅	日本	飛行機からの遠望	有能感
長城にたちて	中国・日本	万里の長城の情景	日本の貢献
愛	外つ國人	恩寵への応答	国際協調

（全曲中一曲ではあるが、第一期『満洲唱歌集』の《愛》は「外つ國人と手を取りて、共に平和を楽しまん」として人類愛の観点から書かれている。）

表５の分析結果から了察されるのは、他の民族との協調が求められる土地で育つ子どもたちへの郷土教育を意図した歌が「社会構造の転写」を表象する歌に、また、満洲に生きる日本人の社会的責任の自覚は日本による「開拓と維持の肯定」を表象する歌になっていることである。そして、このふたつの傾向は第一期と第二期の教科書内容の違いでもあり、第一期の教科書には「社会構造の転写」が、第二期の教科書には「開拓と維持の肯定」がより強く表れている。

こうした傾向は挿絵にも表れている。第一期の唱歌科教科書の抜粋篇、『満洲唱歌集』（南満洲鉄道株式会社社長室情報課 1928）の解説や挿絵からは、新しい唱歌の作成に際して満洲に題材を求め、当時の在満日本人の生活を描写したことが社会構造の転写につながったことが見てとれる。たとえば《栗売》の解説では日本人の家庭の冬の暮らしが紹介されており、ペチカやストーブで温められた室内で中国人の栗売りから買った温かい栗をむきながら、夜が更けるまで故国の噂を語りあうとして、挿絵（図３右側）が添えられている。（同掲書：21）

《石炭くべませう》

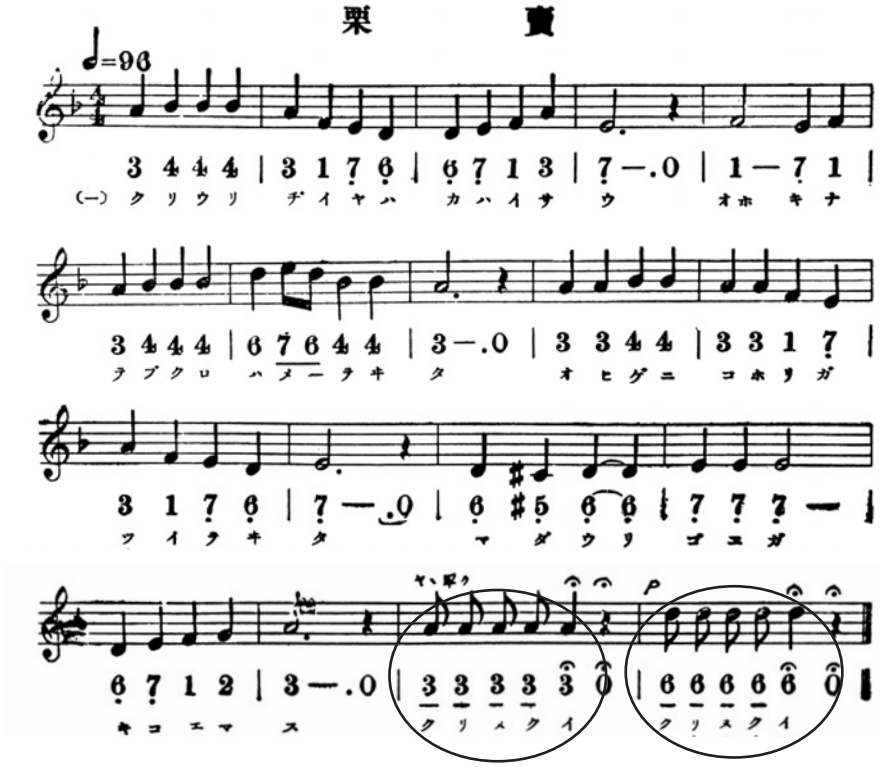


《栗売》

図３　満洲唱歌の挿絵の例

『満洲唱歌集』1928 年　南満洲鉄道株式会社社長室情報課

ところが《栗売》（譜例 10）の歌詞のなかでは日本人と中国人の生活が対比的に表れており、歌詞の中に租借地の治外法権の力学が顕現している。



譜例 10　憐憫が子どものことばで表現された例

《栗売》

一　栗売ぢいやは　かはいさう。　大きな手袋　はめてゐた。おひげに氷がついてゐた。
　　まだ売声が　聞こえます。「栗ぬくい、栗ぬくい」
二　栗売ぢいやは　かはいさう。とうさんまだかと　小さい子が、ねんねもしないで待ってませう。
　　早く帰っておやりなさい。「栗ぬくい、栗ぬくい」

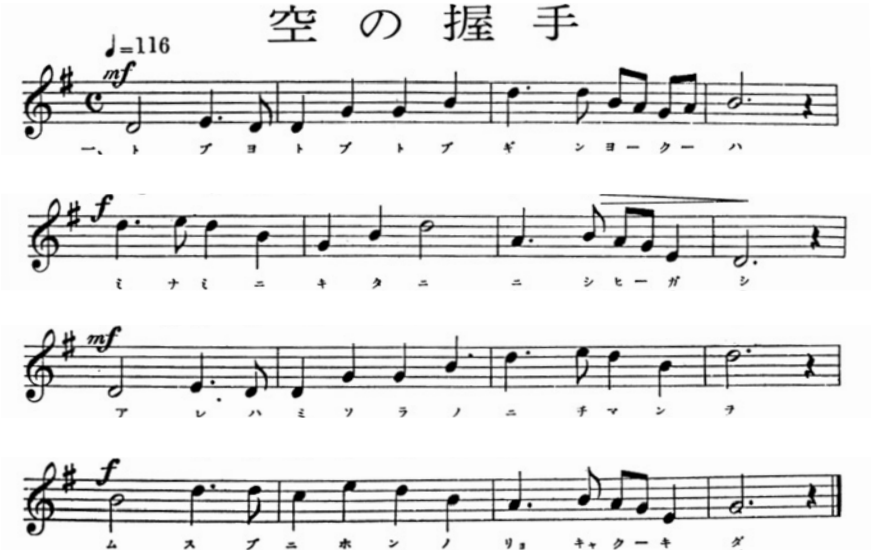
第一期『満洲唱歌集』第三・四学年用　1928 年三版　（初版は 1926 年）

解説文にある「栗売りは冬籠りには無くてはかなわぬ景物である。栗売りは…支那人で、拙い日本語で「栗ぬくい」と呼ぶのも憐である。」という表現からは、圧倒的な生活格差が感じられる。同じ教科書内の《石炭くべましょう》の挿絵（図３左側）には日本人の家庭の豊かな暮らしが描かれており、ストーブの中で燃えさかる炎と女児の足首まで下げられた靴下が春のように温かい室内を感じさせ、手前のバケツのなかに高く盛られた石炭やストーブの向こうで本に見入る母子の様子には、生活のゆとりが表れている。栗売りを「景物」として自らの暮らしとは距離を置き、中国語化した日本語で「クリヌクイ」と売り歩く声を「拙い日本語」と評すること（譜例 10 の最後の二小節部分）や、酷寒の中での労働の厳しさを「憐」とする感じ方の背景には、日本人の優越意識があるともいえよう。

このように曲の解説や挿絵を参照していくと、氷点下の戸外で焼き栗を売り歩く中国人を「栗売ぢいやはかはいさう」と表現した《栗売》の歌から、租借地の現実が見えてくる。栗売のように単調で労の多い仕事が当然のように中国人に割り振られた環境で育つ子どもたちが、こうした関係を互いの役割として理解して「バアヤ」、「ぢいや」、「ニーヤ」ということばを使うとき、意識の中には社会構造が転写されていく。そして、そうしたまなざしが満洲唱歌の歌詞に子どものことばとして出現していることは、日本人を優位とする社会のあり方がすでに慣習になっていたことを示唆している。

また、析出された第二の傾向――「日本による開拓と維持の肯定」を表象する例としては、飛行機や鉄道（満鉄）が文明の象徴として描かれていることが挙げられる。鉄道・飛行機を題材とする満洲唱歌は第二期『満洲唱歌集』三・四年生用教科書を中心に配置され、日本の事業が公益につながる善いもの、輝かしいものとして、力強く明るい曲調で肯定的に描かれている。

日本と満洲の航空路のつながりを謳った《空の握手》（譜例 11）には、日本の資本と知識、技術力に対する信頼があふれている。子どもたちは満洲の青空を突っ切るように進んでいく旅客機の晴れやかな姿を、胸を躍らせて見上げたことだろう。



譜例 11　日本の資本と技術を称揚した例

《空の握手》

一　飛ぶよ飛ぶ〜　銀翼は　南に北に　西東、
　　あれはみ空の日満を、むすぶ日本の　旅客機だ。
二　雪の蒙古や　興安の、こほる風さへ　なんのその、
　　あれはみ空の日満を、むすぶ日本の　旅客機だ。
三　かぢを力に　右左、かけるよ　ばく音勇ましく、
　　あれはみ空の日満を、むすぶ日本の　旅客機だ。
四　鳥の姿か　身の軽さ、夕日をあびて　一文字、
　　あれはみ空の日満を、むすぶ日本の　旅客機だ。

第二期『満洲唱歌集』第四学年用　1934 年初版

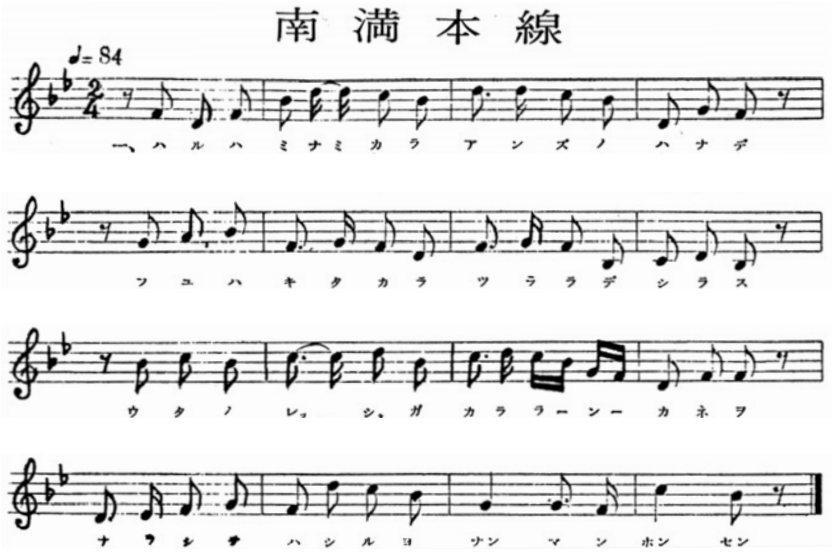
航空路は日本航空の東京――大連線に対して満洲航空が新義州でこれと連絡し、新京、奉天、哈爾濱、斉斉哈爾、錦州は航空上の拠点でもあった。（磯田・槻木・竹中・金編 2000b：25、55-56）

そして、陸路の雄は満鉄とその特急列車であった。

満洲の経営に重要な役割を果たした満鉄が 1934 年から運転を始めた特急「あじあ号」は当時の技術の粋を集めたアジア最速の列車であり、満洲の日本人の誇りとするところであった。時間通りに広野を疾走する「あじあ号」の雄姿は最新の知識と最高の科学技術の象徴として、強く、たくましく、誠実なものに映ったことだろう。満鉄の駅周辺と線路を中心とし

た細長い土地は、満鉄付属地として日本が中国から租借している土地であり、中国領土の中の日本であった。そこを駆け抜ける「あじあ号」は早くて確実な輸送手段という実利を超えて、日本の誇りと希望を体現していた。

「あじあ号」の雄姿を謳い込んだ譜例 12《南満本線》[49]（第二期第五学年）は軽やかな旋律に乗って、鉄道を基軸に展開される日本主導の開拓や開発を「使命」としている。



譜例 12　開拓を「使命」とした例

《南満本線》

一　春は南から　杏の花で、冬は北から　氷柱で知らす。
　　詩の列車がからゝん鐘を、鳴らして走るよ　南満本線

二　神の御使、平和のしるし、「はと」はよく飛ぶ　かはいゝ鳥よ
　　和みうるほひ　たゞ一筋に、緑野走るよ、南満本線

三　愛の動脈、力の泉、つきぬ勢（きほひ）を　姿に見せて、
　　かけれ「あじあ」よ、たゞ一筋に、拓く使命は、南満本線

第二期『満洲唱歌集』第五学年用　1935 年初版

質問紙調査と聞き取り調査の中でも、満洲に住む日本人子女の誇りであった「あじあ号」の雄姿は、満洲唱歌の旋律と共に今もなつかしく回想されている。

49 《南満本線》の歌詞には平和の象徴とされる「はと」が神のみ使いとして謳われ、キリスト教の教義の影響が感じられる。

3）　特徴語の文脈からみた社会認識

歌詞の定量テキスト分析の結果から特定した語（特徴語）に焦点を合わせて、社会的な意識のながれを見ていったところ、第二期の高学年以上の唱歌科教科書（ことに高等小学一年用）では「私」を捨てて組織に殉じることを是とし美化する傾向が強く、支配階級の道義、あるいは前近代からの日本人の精神的な規範が侵略の是認につながっていることが推測された。

内容調査と内容分析の結果から恣意性を排除するために、『満洲唱歌集』の歌詞を特徴語とそのつながりから見ていくと、「国」とは日本か満洲国を意味しており、「子」という弱者に中国人が関連付けられるケースが用例のほぼ半数（17の用例のうち、幼獣・幼児８/17、中国人の子７/17）に及んでいた。満洲唱歌に謳われた中国人が「バアヤ」、「ぢいや」、「苦力」、「大姑娘」などの単純労働に従事する人たちであることを考え合わせると、こうした中国人に対する憐憫のまなざしからは、教科書編輯委員会が標榜していた教育による文明化にはオリエンタリズムがすでに内在していたことがみてとれる。

また、「日本」は犠牲を恐れず、果敢に使命を遂行する国として描かれ、10の用例中の半数は日本男子（やまとおのこ）・日本女子（やまとおみな）の戦死・殉死につながり、「勲」、「雄叫び」、「雄々し」の語とつながることが多い。そして、「雄々し」は「陸軍」、「マスラオ」、「つわもの」とつながっている。さらに「使命」とは日本の国威宣揚か東亜の新秩序の建設を意味し、６つの用例の半数は諜報活動を謳っている。感動詞「ああ」で表現されるのは中国での戦闘による殉死や戦死、あるいは満洲国建国であって、在満日本人としての意識が軍事行為の容認につながっていることが了察される。

このように開拓や軍事行為を容認する傾向は、「輝く」、「光」、「光る」のような一般的なことばの用例の一部が満鉄関連のアジア号や鉄路、満洲国、日本の軍人の功績に結びつけられていることにも表れている。「平和」は国際関係だけではなく、用例の半数は満洲の開発や満洲国に関連し、「敵」とは　ロシア（ソ連）か中国（国民革命軍、匪賊）であった。これらの語と語の結びつきの調査からは、「大東亜新秩序の建設」を名目とした軍事行為や開発が多くの犠牲（民間人や女性を含む凄惨な死）を伴っていたことが、「使命」のために「私」を捨てた立派な行為として強調され、読み替えられていったことがみてとれる。

そして、こうした満洲の戦闘がリアルタイムに教材化されていることも、満洲の唱歌科教科書の特徴である。磯田一雄は、『満洲唱歌集』が「日本内地の国定教科書以上に政治的社会的状況を敏感に反映している」（磯田2000b：150）として、第一期を増補・改訂した第二期『満洲唱歌集』には「満洲事変以後の情勢の反映」して「直接戦意昂揚をはかるような教材」が増えたことをすでに指摘している（磯田2000b：163）。しかし、表６の七曲中の三曲は（太字で表記）題材になっている戦い自体が初版の1929年以降に起こっていることから、これらの唱歌の編入は、磯田（2000b）が指摘した編集の時期による改訂だけではなく、版を重

ねる際の改訂作業によって編入されたものと考えられる。重版の際に命を懸けた「忠君愛国」の新曲が編入されていることは、唱歌科教科書の編集作業が時局の変化に迅速に対応していたことを表しているが、ここで、教科書編輯委員が現職教師であったことを思い起こそう。

唱歌科では科目の特性上、教科書に掲載された教材のすべて学ばれるわけではないが、優秀な教師たちが、子どもたちの成長や発達を考慮しながら時代に対応できるように準備した教材が、軍歌である意味はきわめて重い。

表6　第二期『満洲唱歌集』にみられる戦闘

学年	発行年	曲名	題材になった事件・人物
第五学年	(1935)	《軍旗へ》	(1931 年 12 月の古賀中佐の戦死)
第五学年	(1935)	《ああ百七十六騎》	(1905 年の新開河の永沼中佐の挺身隊)
第六学年	(1936 改訂 1929 初版)	《白襷隊》	(1904 年 11 月の旅順戦の中村少尉)
第六学年	(1936 改訂 **1929 初版**)	**《北大営の戦》**	(**1931 年** 9 月の柳条湖事件)
第六学年	(1936 改訂 **1929 初版**)	**《南嶺戦》**	(**1931 年** 9 月の南嶺戦の倉本大佐)
第六学年	(1936 改訂 1929 初版)	《嗚呼二烈士》	(1905 年、奉天戦の間諜の死)
第六学年	(1936 改訂 **1929 初版**)	**《殉国の女性》**	(**1932 年**、陶家屯事件の川添巡査夫人)

こうした編輯委員たちの意識と連動するように、在満日本人社会が戦闘による同胞の死に対して敏感に反応していたことが、新聞や雑誌の記事に表れている。

教科書編輯部を包括していた南満洲教育会の機関誌『南満教育』1928 年 6 月号巻頭言には、前月に起こった済南事件を「亜細亜の大局を誤る中国国民革命軍の暴挙」とする悲憤が掲げられている。そして日本人同胞の死に対しては深い同情を寄せ、さらに編集後記にことばをつないで強く憤っている。

> 済南に於ける同胞の死に際□（欠字…筆者注）ては、もう哀惜の念に堪へない……といふやうな微温い言葉では盡せない。腹を刳る怨みと悲しみに満たされる。が、天の摂理は決して犬死に終わらせるものではない。必ずや尊き犠牲としての冥福を祈り得るであら□（欠字…筆者注）。永遠の旅路に彷ふ勿れ…（南満洲教育会 1928：「編集室窓外」）

済南事件は 1928 年 5 月、中国国民党の北伐による革命波及の阻止を目的に挑戦した、日本陸軍による武力干渉である。日本軍の総攻撃による市街戦が多数の一般市民を殺傷したために、中国側世論は日本が名目とした在留邦人保護の範囲を逸脱した主権侵害として非難し、対日感情の急速な悪化を招いた。

『南満教育』 6 月号巻頭言では中国の世論の強い反発と抗議に触れながらも、欧米に匹敵する東アジアの新秩序の建設を、時宜にかなう日支の課題として優先するように「賢明なる

中国人に告ぐ」内容が主調で、事件に対する即時的で情緒的な反応が在満日本人社会で共有されている。関東洲は内地の飛び地[50]として「国威宣揚の最前線」にならざるを得ない（磯田 1999：26）傾向にあったとされるが、教育関係者向けの雑誌に掲載されたこの記事には、「民族協調」という仮想的なあり方が在満日本人社会のなかで必然的な現実として錯覚されていることが表れている。

第３章　満洲の唱歌教育の受容

前章における教科書調査の結果からは、満洲唱歌がさまざまな創意を凝らして作られた地域教育の歌であることが明らかになった。では、当時の子どもたちは学校で習った満洲唱歌をどのように歌い継いだのだろうか。今度は学習者の立場から満洲の唱歌教育を見直してみよう。

この章ではすべての調査のまとめとして、協力者９人の満洲唱歌の思い出と評価の内容を読み解きながら、満洲の唱歌教育の意味を考えた。受容の調査では、すでに敗戦後 65 年を経過していたことを考慮して、満洲の唱歌教育に関する記憶を学校生活だけではなく、遊びや日常生活を含む満洲の生活全般の思い出と関連づけて質問した。その結果、集まった回答の内容から明らかになってきたのは、満洲都市部の教育の内容や生活が豊かで充実していたことであった。

第１節　満洲の学校教育と唱歌教育

質問紙調査の結果では、満洲都市部の学校設備はよく整っている。校舎は煉瓦造りや鉄筋コンクリート造り二階建て（あるいは三階建て）で、回答者全員が教室はスチーム暖房で、唱歌室にはピアノやレコード、蓄音機が備えられていたとしている[51]。そして、回答者本人や兄弟姉妹が楽器（ピアノ、マンドリン、バイオリン、ピッコロ）を習っていることが多いのは、都市部に住む日本人の生活が比較的裕福であったことに加えて、大連が自由港で楽器や楽譜、レコード、蓄音機が安く購入できたという地の利の影響であろう。

満洲では大正期から童謡が好んで歌われていた（編集者不明 1932：142）が、1924 年の第一期『満洲唱歌集』刊行後は『尋常小学唱歌集』の補充として用いられるようになり、1930 年には正規の教科書として公布された（同掲書：191）。しかしながら、満洲唱歌ばかりが歌われていたのではなく、内地と同様に学校儀式では祝日大祭日唱歌が歌われており、戦時中

50　質問紙調査の生地についての回答のなかに、大連生まれを日本生まれと注釈をつけた３例が含まれ、そのうちの一人は「関東洲は日本ですから、僕らは日本育ちの日本人だ」と明言された。現地で暮らす日本人には、関東洲が日本として明確に認識されていたことがうかがえる発言である。

51　満鉄付属地の小学校や国民学校では、さらに「日露戦争の戦利品」というバイオリン、チェロ、トロンボーン、フルートが置かれていたという。（吉岡数子さん 2010）

は敵国の歌は自粛され、軍歌や軍事歌謡が歌われていたこともまた、内地と同様である。そして、唱歌時間の学習方法は聴唱であったとする回答が多く、回答者の三分の二は二声部以上の合唱と和音訓練を経験していた。

そのようにさまざまな歌が歌われていたなかでも、全曲書き下ろしの満洲唱歌は人気がある。学校内だけではなく校外での自主的な遊びや集会でも、子どもたちにも大人にも歌われて、第三期以降の唱歌科教科書で『新訂尋常小学唱歌集』からの曲目が多く掲載されるようになっても、歌い継がれている。

しかし、質問紙と聞き取り調査で明らかになったのは、特定の祭りや情景を題材にした唱歌には子どもたちの興味や関心にも濃淡があることであった。満洲唱歌は生活に根ざしたものであったがゆえに、子どもたちが暮らしていた都市の自然環境（気温）や風習の違いによって生活感情には違いがあり、唱歌の題材自体を経験していなければ関心が薄く、すべての満洲唱歌が懐かしいのではなかった。《たかあしをどり》や《娘々祭》のように人気のある歌でも、実際に高脚踊りを見聞することのない新京の日本人居住区内では掛図で説明され（新京・哈爾浜：吉岡数子さん 2010）、歌だけではなく、銅鑼や爆竹の音の騒々しさや街に漂う匂いなど、満洲の風土そのものが自分には合わなかった（森田華子さん 2010）とする人もいるなど、満洲唱歌への思いは一様ではなかった。

また、調査の結果から満洲の教育が内地と異なると思われたのは、男女別学と皇民教育の実態である。内地では低学年で男女共学、高学年で男女別学の学校が多いが、満洲では校舎を別って六年間の男女別学が徹底されている小学校がある一方で、六年間を通して男女共学の小学校やクラスがあったことがみとめられた。

さらに、皇民教育の方針は内地と共通していても、具体的な指導には違いがみられた。

教育勅語は満洲の学校儀式においても奉読され、最敬礼の指示は出されているが、内地のように絶対的ではなく「頭を下げて敬意を表していればよかった」や「私語は禁じられていたが直立だけだった」とする回答が複数みられた。こうした結果から、満洲の学校では儀式の作法においても子どもの心情を尊重して画一教育を嫌い、主体性を重んじていたことがうかがわれた。

第２節　想起―満洲唱歌は記憶の引き金

第１項　満洲の記憶

調査の回答にみる満洲の生活は、戦後の日本の都市生活を数十年先取りしたように快適で西洋的である。

・エレベーターのある高層住宅に住んでいたことを話しても、内地の人には信じてもらえなかった。（大連：安増照子さん 2010）

・上下水道はそろっていましたよ。もっとも今みたいに完全なものではありませんでしたけどね。（大連：藤田昭さん 2010）
・大連は自由港だから外国の物が安く買えて、内地の物は北海道から船が来るから何でも手に入るから、物がなくて困ることはなかったよ。（大連：小池妙子さん 2018）

また、回答者の普段着は全員洋装であった。これは冬の寒気に対する健康管理の観点から、満鉄学務課長保々隆矣[52]（1883-1960）が推進した防寒外套[53]の普及（補助金付き）と戸外スポーツの奨励に依るところが大きい。保々が着任後最初に敢行した教育改革は、極寒の気候に負けない身体づくりのために「生徒に防寒外套を着せて冬の「満洲」で遊ばせることだった」（竹中 2000b：188）。

そうしたことから満洲の学校教育では夏は水泳、冬はスケートが奨励されて、回答者は体育の授業だけではなく放課後や休日もスケートを楽しんでいる。

・冬になるとね、家の庭にバケツで水を撒いて凍らせてね、兄弟でスケートしてグルグルまわるの。…小さい時からすべっていたよ。兄弟がみんなすべっているから。（大連：小池妙子さん 2010）
・スケート靴はスピードスケート用とフィギュアスケート用の二つ、持ってました。（新京・哈爾濱：吉岡数子さん 2010）

さらに、体力づくりとならんで満洲の日本人教育で重視されたのは、中国語の学習である。満洲の発展のためには日本人の人材育成だけではなく中国人の理解と協力が必要であったので、満洲の日本人学校では中国語の時間が設けられていた[54]。

中国語学習の成果については中国人と会話ができる水準ではなかったようだ[55]が、回答者の三分の二は「中国語学習は役立った」とし、そのうちのひとりは「中国語を学習中」と答えている。日本人と中国人の学校は原則的には別であったが、少数ながら日本人の学校に通学していた中国人もあり、回答者の四分の三は中国人と遊んだ経験があった。

しかし、中国人と日本人の居住地は分かれていた。

52　保々隆矣は帝大を優秀な成績で卒業した内務官僚であったが、1920 年 1 月に学務課長として満鉄に入社した。保々は現地適応主義の方針をとって、満洲独自の教育とされた子どもたちの体力づくりと中国語教育の奨励、教育研究所の拡充、満洲補充教科書の編集事業などの事業を展開する原動となった。（竹中 2000b：177-203）
53　見本となったのは、毛皮襟のついた綿入れのオーバーコート。（竹中 2000b：187）
54　同郷誌には中国語の時間の回想も寄せられている。「先生が入室して教壇に立たれると、起立、礼、着席と級長が声をかけましたが、中国人の先生の場合には、チャンチュライ、シンリイ、ツォウシャと中国語を使ったものです。」（東京撫順会 2012 復刻版：83）
55　「学校で中国語を習いましたが、満人の方たちが日本語が上手で、あまり役に立ちませんでした。」（安増照子さん 2010）

・大連の満鉄の社宅は坂の上、坂の下には中国人が住んでいたのよ。（小池妙子さん 2017）
・夏になると中国人の人が家の前で寝るのよ、ごろっと。そんなの出入りするときにいやだから、地面にお水まいてた。あの頃は（そうした行為の意味を…筆者注）あまり考えていなかったねえ。（小池妙子さん 2017）
・（新京は）中国の長春の古い町を全部壊して、日本人のための大きな町を区画して作ったんです。中国人の夫婦が昼食を作りに来てくれてたけど、生活圏は別でした。日本は中国人の子どもの小学校も作ったけど、町から離れた所に作って子どもの足では通えないから、中国人の子どもたちは学校に行っていなかった。（吉岡数子さん 2010）

さらに生活圏も中国人と日本人では異なっていた。

・大連にはデパートも立派な商店街もあったけど、中国の人はいなかったよ。見たことないわ。中国の人は入れなかったんじゃないの。（大連：小池妙子さん 2017）
・学校・病院・百貨店・劇場・レストラン・公園・ゴルフ場・銀行・官舎・公共施設等は贅を尽くしたもので、原則日本人専用でした。（新京・哈爾濱：吉岡数子さん 2010）

都市部の日本人の生活は中国人の労働に支えられていたが、回答者の回想からは日本人と中国人の居住地や生活圏は別である。また、ことばによる伝え合いも十分とはいいがたく、目標とされた民族協調と生活の現実には隔たりが感じられる。

第２項　満洲唱歌

最後に、回答者の満洲唱歌の思い出をたどりながら、満洲唱歌が当時の子供たちに及ぼした作用を見ることで唱歌教育の意味や成果を見ていこう。敗戦ののち、「生まれ故郷」を失った満洲唱歌は内地で歌い広まることはなかったが、旧在満日本人の心を住処として、戦後も影響を与え続けていた。小学校で学んだ歌がアイデンティティ形成に作用し、社会関係にも影響していることは、予想をはるかに超えた現実であった。

１）満洲育ちの「みんなのうた」――共感の共同体の生成

1945 年８月の敗戦ののち、多くの在満日本人の生活や逃避行は艱難を究め、引き揚げ後も生活の困窮と差別に苦しんだ。ことに在満少国民として教育されていた子どもたちには、引き揚げ後の内地での経験が意外で困惑したことが読み取れる。

・（内地の人が）余りにも大連および満洲の事を知らないのに驚いた。生活上困ったことはないが、教育の点では大連の方が断然レベルが高かった。外地からの引揚者ということで、特に地方（大都市以外）に引き揚げた人達は軽蔑されたり、馬鹿にされたり、逆に羨望の目で見られたことは、多くの引揚者が経験している。…関東洲は日本だからね、僕らは日本生まれの日本育ちだ。満洲育ちじゃない。（太田豊さん 2011）

・（満洲は標準語だったので、帰国後は住んでいるところの…筆者注）方言の発音の違いに困った。日常生活で困ったことはない。（森田華子さん 2010）

さらに、敗戦後の経験は引き揚げ者同士の間に確執や沈黙をたらしてもいる。

・近くにね、とっても仲の良かった人が住んでいるんですけどね、話ができないんですよ。皆で仲良く暮らしておられたのに、遅れて帰ってみえたときには本人と弟さんとお母さんの三人だけだった。何があったかわかるでしょう。何も聞けないし、向こうもつらそうな顔して何も言わない。ずっとそうなのよ、何年たっても。（安増照子さん 2010）

敗戦と引き揚げによる離散によって、満洲唱歌の記憶は一旦凍結されている。しかし、満洲唱歌はそれを歌うことによって過去を呼び返し、そのときどきの心境に作用して現実を作りだしていたことが、同窓会の文章にみられる。

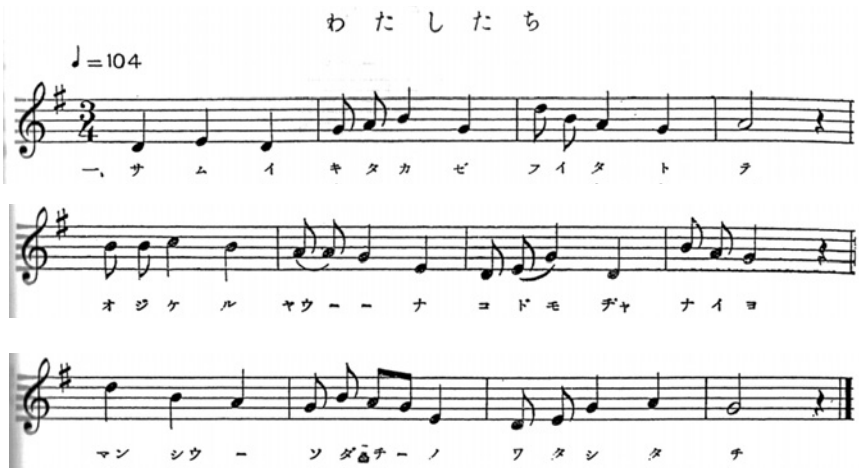
七十年前習った時は童謡であった歌は、子育ての時の子守歌となり、生涯も終りに近づいた此の頃は鎮魂の歌となりつつあります。（旅順高等女学校姫百合会三十一回生有志 2003）

個人が抱く音のイメージには個人史や愛や望みのような心的作用が織り込まれる傾向があるが、「生まれ故郷」を失った満洲唱歌は、想起されることによって引き揚げ帰国子女の文化的なアイデンティティを担保し、在満日本人としての集団の記憶の中に架空の「場所」、つまり「生まれ故郷」を提供している。回答からは、満洲で唱歌教育を受けた子どもたちの共有物であった満洲唱歌が、敗戦後は故郷を失った「都市の住民」のアイデンティティの象徴となっていることが読み取れる。

・満洲唱歌については、すべてなつかしいの一言につきます。未だに皆と、よく歌います。（太田豊さん 2011）

・ぼくはね、向こうが故郷だとおもっているからね、ときどき帰りたくなって……行くんですよ。（藤田昭さん 2010）
・当時は日本人というだけでエリートでした。中国人の犠牲のもとにですが、だから、その反動は大きかったと思います。故に古き良き時代の楽しかった頃のことはあまり口にしたがりません。でも、そういう時代は確かにありました。（安増照子さん 2010）
・同窓会へ行くとね、昔の友達に会えるでしょ、みんな苦労しているから何にも言わなくてもわかるでしょ。……みんなで《わたしたち》を歌うとね、元気でんの。（小池妙子さん 2010）

聞き取り調査の中で、同窓会で合唱されているという《わたしたち》は第二期『満洲唱歌集』第三学年用に配された歌である。この歌は唱歌の授業で歌われただけではなく、学校の運動場や自宅の庭を凍らせて作ったスケートリンクで滑りながら歌ったり、友だちと連れ立って帰る道すがら歌ったりされたので、旧在満日本人には年齢を越えて親しまれている[56]（喜多 2003）。



譜例 13　同窓会でよく歌われる満洲唱歌《わたしたち》

56 《わたしたち》は質問紙調査のなかでもよく記憶されていた歌であるが、喜多由弘（2003）『満洲唱歌よ、もう一度』（とくに二章以下）には、この歌についての多くのエピソードが紹介されている。

《わたしたち》

一　寒い北風　吹いたとて　おぢけるやうな子どもぢゃないよ　まんしうそだちの　わたしたち
二　それに雪さへ　降ったとて　たまげるやうな子どもぢゃないよ　まんしうそだちの　わたしたち
三　風の吹く日は　外に出て　リンクをまはろよ　スケートあそび　まんしうそだちの　わたしたち
四　雪の降る日も　外に出て　みんなでしませう　雪投げしませう　まんしうそだちの　わたしたち

第二期『満洲唱歌集』第三学年用　1933年初版

満洲では寒さに負けない体力づくりのために、全域にわたって子どもたちの外遊びが奨励されていた。[57] 氷点下30度の戸外でも、子どもたちは「普通に遊んでいた（小池妙子2010、吉岡2010）」し、氷点下25度までは戸外で遊ぶように指示されたという。同窓会で歌われる《わたしたち》は三拍子の流れに乗ったわかりやすい歌詞で、スケートをしながら実感を込めて歌われたことだろう。満洲で経験した身を切るような寒さが戦後のさまざまな困難に置き換わっても、長く厳しい冬のまにまに、兄弟姉妹や友達と声を合わせて歌った記憶は忘れまい。

歌には作品としての価値があるだけではなく、場を同じくして共に歌うという社会的行為や、声が響きあうという即時的な生の現象のなかにも重要な意味がある。旧在満日本人が同郷会や同窓会で出会う人たちは自分がかつてその場所に生きたという事実を保証してくれる人たちであり、満洲唱歌を合唱するときには、人知れぬたくさんの思い出とともに心理的な埋め込みを実感したことだろう。

満洲の景物を題材に満洲の音やことばを取り込んだ満洲唱歌は生活の記憶と強く結びついて想起されており、唱歌科教科書編輯委員の企図――「満洲で生まれた日本の子どもたちに満洲の地霊を感得させなければ故郷としての親しみはもてないだろうと考え、なんとかしてこの土地らしいうたを新しく作らなければならない」（園山1973：6石森延男序文）――は、高い水準で達成されている。

しかし、郷愁の想いに被覆されてはいるが、ここには教育の根幹にかかわる問題が存在する。《わたしたち》は外遊びをするときの子どもたちの心情にあった応援歌としてなつかしく語られ、遊びの名のもとに不可視化されているが、小学生に氷点下25度の戸外で遊べというのは行き過ぎた指導ではないだろうか。従来、雪遊びやスケートによる体力づくりは遊びの延長として認識され、子どもたちの自由や自発性を尊重した指導法として評価されてきたが、酷寒のなかであるのなら、まぎれもない鍛錬であろう。こうした指導が満洲全域の日本人学校で奨励されていたのは、当時の教育の目的が、日本の発展を保証するに足る強い身

57　極寒のなかでも外遊びが奨励されていた様子は、同郷誌にもみられる。「昼休みの休憩時間が来ると週番の先生が回ってきて、皆外へ追い出された。しかし零下二十五度を超えると強制はされなかったように記憶している。」（東京撫順会2012復刻版：22）

体と意志を備えた能動的な人間を育成することであったゆえである。子どもたちの感性や人格の尊重に配慮しながら子どもの自発性を教育的にコントロールし、究極のところでは子どもを資源として見ているのは矛盾であり、先進的といわれた教育の限界を示している。

2） 満洲唱歌の評価

これまで見てきたように、満洲の記憶はなつかしいだけではなく痛みを伴って想起されており、旧在満日本人の間には沈黙や確執もある。そして、引き揚げ帰国子女のなかの歴史認識も一様ではなかった。

そうしたことから、満洲唱歌の評価については歌に郷愁を覚える人たちがいる一方で、在満日本人の豊かで平和な暮らしが中国人の犠牲の上に成り立っていたと考える人たちの評価は、消極的であった。

・満洲唱歌が懐かしいかと聞かれたら、そりゃ懐かしいですけど、満洲のことを全部思い出すんです。つらいです。（吉岡数子さん 2010）

満洲唱歌への思いを「つらい」とする心中は察するに余りあるが、この回答にみるように満洲唱歌は称賛される一方で留保され、評価は二分されている。

しかし、いずれの立場にあっても、政治的なまなざしのもとに有能で教育経験豊富な教師によって創作された満洲唱歌は、在満日本人の文化アイデンティティ形成に作用し、満洲の記憶と関連しながら戦後の生活にも影響を及ぼしていた。引き揚げ者として冷遇された帰国子女には内地の日本人とは異なる自己形成がなされていたことがうかがわれ、「児童の日常目撃するもの」を題材に創られた満洲唱歌は、満洲で唱歌教育を受けた子どもたちの共有物としてアイデンティティの象徴となっていた。

第４章　考察

満洲独自の唱歌科教科書は、現職教師（あるいは経験者）が満洲に生きる優れた日本人の育成にふさわしい内容を共同で吟味し、作成したことで、文部省編纂の『尋常小学唱歌集』・『新訂尋常小学唱歌集』よりもはるかに明確に新教育思想を反映していた。内地の公立学校では、教育内容の一定水準を担保するために「教授細目」の順守が求められており、新教育の内容をカリキュラムに反映することは困難であったから、南満洲全域の日本人学校（公教育）で新教育が行われていたことの意味は大きい。

唱歌科教科書が「教育実際家」（現職教師や教職経験者）によって編集されたことは教材の分かりやすさに結びついており、『満洲唱歌集』は全曲が書き下ろしの新曲であっても日

本語の歌としてわかりかりやすく、在満日本人に受容されやすい特性を備えていた。満洲唱歌の歌詞には子どもの感性が尊重され、子どもの日常が重視されているだけではなく、音声言語としての日本語のアクセントや特殊拍のリズムが生かされている。そして、唱歌の題材は子どもたちのよく知る満洲の生活の中から選ばれ、歌詞には日本語話者が聞き取った中国の音やことばが日本語化して用いられて、声のメディア性が活かされている。こうした耳で聞いてわかる歌の創作は、当時の音楽教育界の期待に応えるものであった。

また、日本は国際社会の一員であるという自負が、当時のドミナント・パティキュラーであった西洋音楽による教育を文明化の使命として遂行させている。唱歌科の学力を読譜力として編集された『視唱教本』は、唱歌科教科書として日本人のみならず中国人の子どもたちにも用いられており（南満洲教育会教科書編輯部 1932：125）（竹中 2005：353）、こうした点から勘案すると、満洲の唱歌教育は国際理解教育を想定したものとして、また、内地の唱歌教育がさらにローカル化した例としてみることができるだろう。

しかし、第２期『満洲唱歌集』の高学年の歌唱教材の内容がファシズムに即時的に合流していることや、厳寒期のスケート遊びの奨励に軽やかな新曲で応えたことは、大正新教育に内在していた膨張主義（たとえば海外に雄飛する日本人の育成）が、満洲という場に作用する力学によって先鋭化して現われたものと考えられ、大正新教育の限界をも示している。

さらに、国際理解を目ざしながら文化的な差異の承認には序列が付与されており、編集方針における在満日本人社会のモラル形成と民族協調のあいだにはねじれが存在する。同文同種や社会的平等、博愛といった平等言説を取り込みながら、異文化のなかで暮らす在満日本人のアイデンティティの担保と育成のために日本の伝統や慣習を尊重し、日本主導の社会秩序の構築と維持を志向している。そして、このねじれは、個人のレベルでは教育という「文明化の使命」や「亜細亜の大局」として意識されており、オリエンタリズムがすでに内面化されていたことがうかがえる。歌詞の内容分析からも「文明化の使命」や「亜細亜の大局」、「東亜の新秩序」といった大きなスローガンの下では、満洲の五族の中で育つ子どもたちへの郷土教育は生活の中の社会構造を転写した歌に、満洲に生きる日本人の社会的責任は日本による開拓と維持を肯定する歌に変容していたことは明らかであった。こうした理念と実態の間にみられる変容は、日本の大陸政策の最前線であった満洲に働く場の力（あるいは感情）――中国領土内にありながら祖国の命運を賭けた日清・日露の戦場であり、多くの英霊の眠る場である日本の「飛び地」として認識されていたこと――によって、満洲の郷土教育の目的であった日本人としてのアイデンティティ形成が、郷土の生活に根差したナショナリズムの構想の中で展開されていたことを示唆している。

さらにいえば、満洲唱歌が即時的に共感を以て迎えられたのは歌に在満日本人社会に見られる郷土意識や社会的責任感が表れていたゆえである。編輯委員会が概念的に依拠したイデ

オロギーは、当時の在満日本人社会における支配的なイデオロギーと重なっており、質問紙と聞き取り調査においても、満洲唱歌は満洲の生活と強く結びついて想起され、編輯委員会が目指した郷土教育――満洲を故郷として意識する子どもを育てること――は高い水準で達成されている。「教科書編輯委員会」という集団によって抽象化された満洲の生活が『満洲補充読本』をはじめとする満洲独自の教科書の内容と連動して直観的に伝えられ、直観的に受け入れられ、満洲の生活の歌を歌うことがイデオロギーへの能動的合意や社会体制への自然な順応を招来したといえるだろう。

また、満洲唱歌は敗戦と引き揚げの後も、満洲で学校教育を受けた子どもたちの共有物として想起され、歌われることによって、時空を超えて旧在満日本人社会への埋め込みを担保している。在満日本人は敗戦によって居住地を追われ、共同体が解体したのみならず、内地においては「引き揚げ者」、「外地育ち」として冷遇されるという二重のディアスポラを体験しているので、満洲唱歌が同窓会や同郷会で合唱されることによる心理的な効果は大きかったと考えられる。

ところが、満洲唱歌の評価は一定せず、郷愁に満ちた肯定的なものばかりではなかった。しかし、評価が分かれていても、満洲唱歌は在満日本人の記憶の底にあり、政治的な立場や歴史認識の違いを越えた感情の器として浸透していた。そして、満洲唱歌は自叙伝として聴かれるだけではなく、よく整えられたことばと分節化されたリズムに乗った旋律が、色彩や匂いなどの共感覚を伴って想起され、歌はイデオロギーの乗り物としてだけではなく、満洲の生活の記憶の引き金となっていた。

こうした満洲唱歌の想い出や評価は、独自の唱歌科教科書の主旨が歌の学習によって内面化され、子どもの心に作用していたという、ひとりひとりの物語でもあった。見方を変えると、満洲唱歌に謳いこまれた生活感情は在満日本人に共感されることによって共同の意識を生成し、戦後は、民族化された共同性の感傷を生成したといえるだろう。教科書編輯委員会が理念とした「民族協調」は生活の現実とは一致していなかったが、満洲に生きることを主体的に受け入れた編輯委員の自己了解と表現者としての内省が唱歌科教科書に遍在しているので、満洲唱歌は文明化による東アジアの統合を信じた日本人の間で共有されたのである。そして、戦間期に作られた満洲の新しい歌「満洲唱歌」は原籍地の異なる日本人をつなぎ、戦後は満洲育ちの日本人をつないで、独自の社会を生成したのである。

第５章　むすび

満洲独自の唱歌科教材である『満洲唱歌集』の歌詞には日本人のまなざしで見た満洲の風土や風俗、在満日本人の生活がわかりやすく描かれ、日本語のはなしことばのビートを活かしたヴォカリゼーションがみられるなど、編輯委員の「教育実際家」としての器量が活かされた、当時としては先進的な芸術教育であった。そして、満洲唱歌の歌詞は在満日本人という「共同」の関係にある人びとの社会意識をすくい取るように体現しており、社会像が共有されている。それゆえ、満洲唱歌は満洲の生活の記憶の引き金となって、戦後も旧在満日本人の社会的文化的紐帯の象徴として機能している。

しかし、満洲の唱歌科教科書は大陸の政治状況と当時の教育思想の結節点に現れた時代の産物であり、その既定を超えてはおらず、「民族協調」を謳う編集方針と満洲唱歌に内在する社会統制への意思の間には矛盾があった。この矛盾はおそらく、満洲育ちの人びとのなかで満洲唱歌の評価が二分されていることと関連しており、満洲唱歌が日本人の生活感情や習慣の文化的再生産の機能を果たしながら、同時に社会統制のメカニズムとして機能し、子どもの意識が階級関係として構造化されていたことが推測された。

こうしたことから、満洲独自の日本人学校用唱歌科教科書は大正新教育に内在していた可能性を具体的に示すと同時に、時代的な制約や限界をも示しているといえる。

満洲唱歌は大正新教育の思潮を存分に吸い込んだ「教科書の歌」であった。しかも、満洲の学校の先生が共同で作った、子どもたちの「生まれ故郷の歌」でもあった。満洲の唱歌教育は断絶して久しく、学習経験者の評価も一様ではなかったが、満洲の生活に根ざして創作された満洲唱歌は子どもたちの心に残り、現実を認識する道筋として過去と現在をつないでいた。このことは満洲の唱歌教育が芸術教育として一定の成果を収めていたことの証左でもある。満洲で学校教育を受けた方々が、戦後 65 年（調査当時）を経ても音や声、歌を感情の乗り物にして過去と向き合う時間を持たれているのは、満洲の日本人教育が日本人社会のなかに限局されてはいたものの、自らの生活の現実に目を向け、主体的に考えることを重視した新しい教育であった成果であるといえるだろう。

参考文献

相原憲二（2008）『祖父の時代――旧制旅順中学校――』　文芸社
秋岡陽（2003）『自分の歌をさがす――西洋の音楽と日本の音楽』　フェリス女学院大学
井上謙三郎編（1936）『大連市史』　大連市役所
磯田一雄（1999）『「皇国の姿」を追って――教科書にみる教育文化史』　晧星社

磯田一雄（2000a）「満洲における補充教科書の編集」『在満日本人用教科書集成』第10巻『教育関係法規・解題』　柏書房

磯田一雄（2000b）「「在満」日本人の音楽教育と教科書―『満洲唱歌集』の改訂過程を中心に」（『教育における民族的相克　日本植民地教育史論Ⅰ』）　東方書店

磯田一雄・槻木瑞生・竹中憲一・金美花編（2000a）『在満日本人学校用教科書集成』第７巻『満洲唱歌集』　柏書房

磯田一雄・槻木瑞生・竹中憲一・金美花編（2000b）『在満日本人学校用教科書集成』第４巻『満洲地理・歴史』　柏書房

今井康雄（2009）「言語―記号からメディアへ」　東京大学出版会　（田中智志・今井康雄編『キーワード　現代の教育学』）

喜多由弘（2003）『満洲唱歌よ、もう一度』　産経新聞ニュースサービス

北大路健（1979）「歌の風土」『満洲のうた』　国書刊行会

金田一春彦（1995）『童謡・唱歌の世界』　教育出版

草川宜雄（1924）『唱歌法及発声法』　京文社

倉本和子（2003）『満洲の遺産』　文芸社　*Manchurian legacy: memories of Japanese colonist*（1999）の本人による邦訳

酒井直樹（2007）『日本／映像／米国　共感の共同体と帝国的国民主義』　青土社

島田英雄（1933）「履歴書」昭和８年４月17日付

小学教育研究会編（1930）『綜合尋一教育の実際』　同文書院　国立国会図書館蔵　永続的識別子　info:ndljp/pid/1052388

鷹野良宏（2006）『唱歌教材で辿る国民教育史～ハナハト世代からサイタサクラ育ちの憶えた歌～』　日本図書刊行会

竹中憲一（2000a）『「満州」における教育の基礎的研究』　柏書房

竹中憲一（2000b）「満鉄学務課長　保々隆矣小伝（一）」『教育における民族的相克　日本植民地教育史論Ⅰ』　東方書店

竹中憲一編（2005）『「満州」植民地中国人用教科書集成』８　緑蔭書房

大連弥生高等女学校「音楽演奏会　曲目　歌詞」1939年３月５日付プログラム（原資料は同窓会誌掲載のもので、安増照子さんから提供を受けた。）

槻木瑞生（2000）「在満日本人教育の歴史」『在満日本人用教科書集成』第10巻　『教育関係法規・解題』　柏書房

槻木瑞生（2009）「満洲の教科書」『植民地教科書と国定教科書』　植民地教育史年報　第11号　皓星社

東京撫順会（2012復刻版）『永安橋――撫順子達のあの頃の思い出』　京都創文社（原資料は1982-1988年の月刊紙）

日中文化協会（1928）『満蒙』９（９）（101）画像63/112　国立国会図書館蔵　永続的識別子　info:ndjp/pid/3567592
日本植民地教育史研究会（2007）『植民地言語教育の虚実』　植民地教育史研究年報第９号　皓星社
花井良夫（1997）「園山民平先生と満洲唱歌」４月23日付配布資料（大連会カ）
樋口耕一（2004）「テキスト型データの計量的分析――２つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19（１）：101-115
樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析』　ナカニシヤ出版
姫路あかしあ会（1986）『満洲の歌』　非売品
平尾佳子（2013）「唱歌教育と日本語音声の標準化―明治の唱歌帖からみた教室の声―」大阪府立大学大学院人間社会学研究科　『人間社会学研究集録８』　pp.133-155
藤森節子（2013）『少女たちの植民地　関東州の記憶から』　平凡社
福岡女子高等師範学校附属小学校国語部ａ「朗読法」1925年２月付　謄写版刷り部内研究資料
福岡女子高等師範学校附属小学校国語部ｂ「尋一国語教育の二三」1925年11月付　謄写版刷り部内研究資料
編著者不明（1932）『関東州教育史』第二輯　奥付欠損
前田均「書評　劉麟玉著『植民地化の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』　高仁淑著『近代朝鮮の唱歌教育』　喜多由浩著『満洲唱歌よ、もう一度』」（2007）『植民地言語教育の虚実』　植民地教育史研究年報第９号　皓星社
増田芳雄（2005）『アジア民族の夢　満洲――日露戦争後の旅順と奉天』　学会出版センター
満洲中等学校音楽科教員研究会『満洲中等唱歌集』巻一・巻二（1979：1938再版の復刻版）国書刊行会
三島わかな（2012）「園山民平の生涯――日本の民謡をもとめて――」『沖縄県立芸術大学紀要』No.20
南満洲教育会（1925）『南満教育』８月号、11月号
南満洲教育会（1927）『南満教育』６月号
南満洲教育会（1928）『南満教育』６月号
南満洲教育会教科書編輯部（1932）『樗の木かげ』　南満洲教育会教科書編集部　非売品
南満洲教育会教科書編輯部（1973）『満洲小学唱歌集小学校１年―６年・付高等小学１年』　謙光社（抜粋篇。資料は東書文庫と白川今朝雄氏（元関東局編修官）所有の複写）
南満洲鉄道株式会社地方部地方課（1917）『南満洲鉄道株式会社経営教育施設要覧』　出版者不明
南満洲鉄道株式会社社長室情報課（1928）『満洲唱歌集』南満洲鉄道株式会社社長室情報課

南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会（1939）『満鉄付属地経営沿革全史』上巻　南満洲鉄道株式会社（『満鉄付属地経営沿革全史』全三巻　（1977）　龍渓書舎）
目賀田種太郎（1878）「我公学ニ唱歌ノ課ヲ興ス仕方ニ付キ私ノ見込」・「メーソン氏推賞其他ニ関する目賀田意見」（英文）『目賀田種太郎関係文書』　東京芸術大学図書館蔵
文部省『学制五十年史』（1922）文部省
文部省内教育史編纂会（1964 重版）『明治以降　教育制度発達史』第 13 巻　教育資料調査会
文部省『尋常小学唱歌集』尋常小学第一学年用（1911）、第二学年用（1914）、第三学年用（1912）、第四学年用（1912）、第五学年用（1913）、第六学年用（1914）
文部省『新訂尋常小学唱歌集』尋常小学第一学年用（1932）、第二学年用（1932）、第三学年用（1932）、第四学年用（1932）、第五学年用（1932）、第六学年用（1932）
山本正身（2014）『日本教育史――教育の「今」を歴史から考える』　慶応義塾大学出版会
吉岡数子（2002）『「在満少国民」の 20 世紀　平和と人権の語り部として』　解放出版社
与謝野晶子（1932）「皇道は展開す」『横濱貿易新報』1932 年 10 月 2 日付　内山秀夫・香内信子編『与謝野晶子評論著作集』第 20 巻（2002）龍渓書舎
旅順高等女学校姫百合会第三十一回有志（2003）「満洲そだち」CD 解説書 Victor NCS-339
旅順高等女学校（1930）『第拾九回卒業記念写真帖』　齋藤写真館

調査の協力者

「満洲の生活と唱歌教育に関する質問紙調査」
大連：森田華子さん、渡辺幸博さん姉弟とそのご友人、太田豊さん、大連・旅順：藤田昭さん、大連・上海：安増照子さん、哈爾濱・大連：小池妙子さん、新京・哈爾浜：吉岡数子さん
「満洲の生活・学校教育・唱歌教育についての聞き取り調査」
小池妙子さん、吉岡数子さん、電話による聞き取り：太田豊さん、藤田昭さん、安増照子さん

多項目にわたる質問に、丁寧にお答えくださいましたことに心から感謝いたします。

The Shōka kyōiku (唱歌教育, the Shōka song education) in Manchuria

— A study based on the "Song textbooks for Japanese school" published by the South Manchurian Association for Education, 1924–1937 —

HIRAO Keiko

This essay is based on content analysis of shōka song textbooks that were published by the South Manchuria Association for Education (1924–1937) for Japanese schools in Northeast China, former region of Manchuria, as well as on questionnaires and interviews conducted by the present author with former Japanese school children in Manchuria. These textbooks were published for Japanese children in South Manchuria, the former Kwantung Leased Territory in southern Liao-dong and South Manchuria Railway Zone. This essay's aim is to illuminate cultural discourses surrounding these shōka song textbooks at the time when, following the aftermath of World War I, the idea of "world peace" was sought politically by the League of Nations. Thus by going beyond criticism of colonial hegemony, this essay reveals the perspectives of the shōka song textbook editors and learners who lived in the Kwantung Leased Territory during 1920–1945.

Manchuria's song textbooks, "Manshu Shoka-shu" (満洲唱歌集), were published after a joint editorial work undertaken by the two governmental departments: the Japanese language department (国語科) and the shōka department (唱歌科). Shōka song education in Manchuria was, first and foremost, a child-centered education. The song lyrics of the "Manshu Shoka" sang about the cultures and lives of Japanese people in Manchuria, while the song melodies were composed in accordance with the linguistic articulacy of spoken Japanese. The chief editors of the song textbooks were education specialists known as the Kyoikujissaika (教育実際家), who contributed to creating the state-of-the-art Arts Education system of this time. Each Japanese communy of Manchuria followed the Japanese public policy, which had carried the slogans of social equality and benevolence. Against this historical background, the "Manshu Shoka" songs depicted the lives of such Japanese communities, and a sense of intimacy shared between Japanese people in Manchuria at this time. In other words, "Manshu Shoka" songs played the key role in illuminating such sense of social and cultural connectedness that had exited in such Japanese communities.

The songs are ,thus, important historical records, which embody the memories held by—and which reveal the lives of—the Japanese settlers in pre-World War II Manchuria. In the present day, these songs continue to reveal the tremendous destructions of war that

followed, and what Japan's defeat of World War II had come to mean for the lives of such ordinary Japanese people.

Having said that, however, the "Manshu Shoka" songs were the products of the political climate and education ideology of prewar Japan: there is an explicit contradiction between the ethos of "ethnic cooperation" as had been put forward by the textbook editors, and the inherent intention of the Japanese authorities to take control over Japanese societies in Manchuria. On the other hand, the Manchurian textbook industry at this time, made use of the "new education" system that had come to be attenuated in mainland Japan. From the perspectives of educating a child's sensitivity, the newly composed "Manshu Shoka" songs for children were categorised as part of the colonial education, precisely because their "home", about which they sang, pointed to none other than Manchuria. These contradictions relate to the divided discourses surrounding the "Manshu Shoka" songs. In other words, the "Manshu Shoka" songs reveal the historical dynamics in which, on one hand, function as the key records of Japanese people's everyday lives in Manchuria, while on the other, the songs' political purpose to occupy Manchurian societies, through attempting to plant in children's minds the disturbing ideas of racial hierarchies.